
変才児

馬河童

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変才児

【Nコード】

N5342E

【作者名】

馬河童

【あらすじ】

ほとんどエロ小説な為、18禁に移行中です。ここには途中（中学生編）までしか掲載しません。あしからず…。ノクターン（18禁）の方で完結しました！

序

私は天才だった…。いや天才という言い方は多少語弊があるかもしれない。何を以て天才と判断するかは難しいからだ。ただ学問的な面においては、他者に比べて比類なき才能を発揮していたのは間違いない、頭の回転がすこぶる良かったのは確かだ。IQは200近くあったのではないかと思う。

だった、と表現するのには訳がある。私は現在、ある事情で身動き取れない状況下にあるのだ。頭脳明晰でもどうにも出来ないのだ。いやその頭脳もそろそろ危ないかもしれない。気が狂いかねない状態だからね、今は…。

そんなものだから、一人で考察出来るわずかな時間、私は己れの過去を振り返っているのだ。何故こんな風になってしまったかをね。それだけじゃない、昔の良かった時代を思い出し、感慨に耽つてもいる。

何？君達はそれを聞いてくれるのかね？それはありがたい。実のところ、人に聞かせるのも恥ずかしい話なのだが、私のような人間がこの世にいたというだけでも知る価値はあるんじゃないかな。まあ聞いて嫌な思いをするかもしれないけれど…。

ただね、君が十八歳以上じゃないとこの話は出来ないな。でないと君がどんな大人になるか心配だし、悪い影響を与えてしまいそうだからね。でも、もし十八歳以上なら臆せず話に耳を傾けて欲しい。私もこのままでは死にきれないし、せめて自分の生き様くらい誰かに伝えたい…。私の魂の叫びを受け取って欲しいんだ。『第二の私』を生み出さない為にも…。

もし聞いてくれるのなら、これから長い昔話に招待しよう。

序 - 2

最初に言った通り、私のIQは200近くあった。そんなものだから、幼少の頃からその頭脳は他を寄せ付けぬくらいずばぬけて冴えていた。幼稚園などでは五十音や、1から10くらいまでの数字などを学ぶが、他の子供が『あいうえお』しか書けない内に、私は夏目漱石の『坊っちゃん』を読み、英語を習得していた。そのくらいの差があった。別に親が特別に指導していたのでもない。家にあった本を読んだだけだし、勝手に頭の中に知識として入ってきていたのだ。そう、一度言われた事は嫌な事でもない限り、すぐに頭に記憶された。

五歳の頃だったと思う。母に連れられて花の咲き乱れる公園に行った。好奇心旺盛だった私はその時、およそ百五十種類もあるそれぞれの花の名前を母に尋ねた。母が全て答えられぬ程に花はあったのだが、私は後に花を見る度に聞いた名が即座に浮かんだものだ。花を貰う機会や、TVで花が咲いている光景が映るごとに、その名を口にする、決まって母は驚いた。ちなみにこの時、花の出来る仕組みなんかも聞いており、おしべだのめしべだのというアレも五歳の幼児の頭にしっかりとインプットされていた。勿論、この時点ではそれが人間の生殖行動にまで適用されるとは夢にも思わなかったがね。とにかく、幼い頃から並外れた頭の持ち主だったのは間違いない。

記憶が良いのは勿論、天才という以上、学校の試験などでもほとんど満点を取っていた。小学校に入学後、95点を下った事は、ある例外を覗き、なかった(それについては後で話そう)。おそらく小学校の段階で、少なくとも高校レベルの学術を理解していたのではなからうか。本などから得る知識だけでも、小学生離れしていただろう。

さらに私の学校は古い体質で、試験の結果を校内に発表して貼り

出すような真似をしていたので、『吉井康介』という名前は毎回一番に載せられた。そして『神童』などと言われてもてはやされ、教師達ですら幾分私になびくような素振りを見せていたものだ。

しかし、当たり前前の事だがそれを快く思わない輩も多かった。世の中、出来る人間ほど嫉みの対象になりやすい。私は『生意気』というレッテルを貼られて、陰口を叩かれたりガキ大将みたいな奴に便所へ呼び出されたりする事もあった。だが、それに関して別段恐れる事もなかった。幸運にも運動神経なども人並み以上に優れていたもので、いざ殴り合いの喧嘩になっても大抵の場合、相手をのして有無を言わせなかったのだ。いつしかガキ大将と呼ばれる人種も私を一目置くようになっていたものだ。彼らから見れば「アイツなら仕方がない」と思わせる所があったらしい。小学校から私は周りに比してずば抜けた存在になりつつあった。

さて、そんな私にもただ一つだけコンプレックスがあった。それは父親がいないという事だ。しかも私はその顔さえ知らなかった。母の話では、私が生まれてまもなく火事で焼け死んでしまい、その時に家の物は全て炎に包まれ、写真の一枚すら残されてはいないという。

とはいえ、特別に『寂しい』という感情は湧いてこなかった。何故なら顔でも見知っていればそれなりの愛情も湧こうが、全く見た事もない人間である。私にとっては正体不明の人物：単に母との共同作業で私をこの世に誕生させた男に過ぎない。そう思い込んで納得しているつもりだった。

だが、先に述べたような陰口が父親の不在に及んだ時、私は烈火の如く怒り、相手を容赦なく叩きのめした。何だかんだと言っても結局の所、父：男親がいない事は私の心に影を落としていた。つまりは完全無欠の天才でありながら、周りの凡人が皆持っていて自分だけ持っていないものの存在が、気に掛かって仕様がなかったのだ。そんな私にとって母は唯一の肉親であった。私が幼少の頃からホステスのような仕事をして二人暮らしの生計を立てていたらしい。世

間的にはあまり経歴の良い人間とは言えず、その証拠に実家からも勘当されていたようだ。事実、私は子供の頃から祖父母に会った事がない。毎朝、厚化粧をして家を出て、仕事から帰って来るのは夜遅くというタイムスケジュール。私が留守番をしている家にも時々全く知らない男から電話が掛かってきて、子供心に母に対して様々な憶測を抱いていたものだ。傍から見えていて学もなく、どう考えても母が私に天才の遺伝子を供給したとは考え難かった。ひょっとすると、彼女は自分の本当の母親ではないのではなからうかと思う事さえあった（結局それは邪推に過ぎなかったがね）。

そんな母だが、学校で『神童』と呼ばれる私に対しては、これ以上ないくらいの甘さ・優しさを持って接してきた。私が欲しい物は（買える範囲内で）何でも買ってくれたし、衣食などにおいてもかなりの贅沢をさせてくれた。もっとも彼女にとっては自分の息子が『天才児』だという事がこの上ない誇りであつたようで、近所のあちこちに私の自慢を言い触らしていた。私は自慢の息子だったのだ。私自身、そんな母を嫌いではなかった。というよりむしろ、自分の子供に媚を売る間抜けな母親だと、内心はバカにしていた。

まあこんな所が私の小学校までの背景である。ここからは、年代を追って話をしたいと思う。

小学生編その1

私は背は人並みに高く、顔もそれなりにいい部類に所属していたので、これで勉強も出来てスポーツも万能となると、割合に異性にもモテた。まあそれが良かったのか悪かったのか、小学生以後の私を左右していく事になる。

ご存じだろうが、小学校の高学年くらいでは男子よりも女子の方がませているものだ。男子がまだ趣味的な遊びなどに（今で言えばテレビゲームなどだろうか）夢中になっっている間に、女子は男子に夢中になり始める。その煽りで私もバレンタインデーには、かなりの数のチョコレートをもらったものだ。その女子の中でも吉永緑、彼女の事をかねてから可愛いと思っていた私は、チョコと一緒にメッセージに添えて交際を始めることになった。

元々、彼女とは仲が良く、二月十四日にチョコを利用して私に告白してきたので『付き合う』事にしたのだ。当時の私は、男女の付き合いなんてものはよく知らなかったし、天才のくせに性的な知識も皆無に等しかった。ただ彼女とは楽しく会話出来たし、容姿も可愛いと思っていたので、一緒にいる事を望んだのだと記憶している。実際、小学校過程での『付き合い』というものは、おままごこのようであり、いいとこ手を繋いで一緒に帰宅する程度だった。

しかし、ある日その状態に転機が訪れた。デートと言えば大げさになるが、緑と二人で遊園地に行った日にそれは起こった。私と彼女は子供らしく、仲良くジェットコースター等の乗り物やアトラクションで満喫していた。私とて知能は進んでいたが子供として楽しいものは楽しかったのだ。園内で半日遊び尽くして、陽も暮れ掛かってきたので、私達は帰りの途に着いた。

近所の公園に辿り着いた時には辺りはかなり暗くなっており、電灯のほのかな光だけが私達の道標になっていた。

「康介君、暗くなってきたわね」

彼女はさも暗闇が怖いとでも言いたげな顔をして私の手を強く握ってきた。

「うん」

私は普段から母の帰りが遅い事などもあって暗がりには慣れており、別に何とも思っていないかったので、彼女が己れの手を強く締め付けた事だけに意識が行き、「痛いな」と思いつつ生返事をした。

「康介君は怖くないの？」

「別に……。いつも夜遅くまで母さんが帰って来るのを待っているからね」

「ふーん、じゃあ私、安心して帰れるわね。康介君が付いて守ってくれるもん」

心底から安堵の表情を見せる彼女。そんなとりとめのない会話をしながらも、私は彼女がいつも以上に親しげな態度を取ってくる事を感じ取っていた。そして手を繋ぐだけでなく、ヤケに身体を寄せてきている事も。暗いという状況が彼女をそうさせているのであるうか、とにかくその日は妙に積極的に接してきた。

二人手を繋ぎ、歩いている内に『吉永』という彼女の家の表札が見えてきた。彼女の帰りを待っていたかのように、明かりが灯っている。

「もう着いちゃったね……」

彼女はまるで家に着いたのが残念であるかのように言った。

「じゃあまた学校で」

私は別れの挨拶をすると、彼女に背を向けその場を去ろうとした。すると、

「待って康介君！」

不意に彼女が私を呼び止めた。何事かと思い振り向くと、彼女は若干目を潤ませてじつとこちらを見つめていた。

「康介君、私の事本当に好き？」

開口一番、彼女が言った。前にも述べたが、当時の私には彼女を可愛いと思う事はあっても、『好き』とかそういう感情を持ってい

るか自分でもよくわからなかった。従って、突然彼女に「好きか？」と尋ねられても、どうにも答えようがないのが自明の理。

が、私は咄嗟に思った。仮に自分が本心ではどのように考えていると、この場合は嘘でも「好きだ」と言った方が彼女への印象は良いものになるだろう。と。その為、私は

「うん、好きだよ。そんな事決まっているじゃないか」と答えた。

「ほ、本当？嬉しい…」

その言葉の通り、顔を上気させて喜びを示す彼女。それを見た私は内心「一体何のつもりだ。こんな事を聞きたいが為に去り行く私を呼び止めたのか？」と苛立たしいような心持ちでいたが、次の瞬間そうだった思いはあっという間にかき消された。何と彼女は私に抱きつき、口唇を合わせてきたのだ。そして、

「今日は本当に楽しかったわ。また明日ね！」

と言って、リンゴのように真っ赤な頬をしたまま恥ずかしそうに家の中へ入って行った。

一人とり残された私は、しばらく彼女の家の前で突っ立っていた。性の営みについてまだ幼かった私は、口唇を合わせるという行為に何の意味があるのか全くわからなかった。しかし彼女とのキスで、私の中の何かが目覚めた。そして何度もキスという行為を重ねたく思い、緑同様、私の顔まで熱く赤くなっていた。これは今までの自分になかった事だ。

帰り道、よくよく考えてみると、今日の緑の様子がおかしかったのは最初からキスする気だったのだとわかった。やはり小学校段階では女子の方がませているようだ。彼女にしてみれば、TV等で現れる大人のキスシーンに憧れ、それを惚れている私とする事で、少々背伸びをしてみたかった程度の気持ちから出た行為の筈だ。しかし同時にそれは別の効果をもたらしていた。まだ精（性）神的に未熟であった私の心の扉をこじ開ける行為でもあったのだ。

その日から私は変わった。勿論、表立っての変化ではない。人目

に付かぬ所で今までとは違った行動を取るようになったのだ。

まず彼女やキスを思い出す度に胸が高鳴った。そして心と共にもう一人の私自身が張り裂けんばかりに膨れ上がった。今までにも訳もわからず屹立する機会はあったが、この時初めてその理由がわかった。次第に私はその心地良さに浸り始め、一人部屋に籠もって頻繁に行為に勤しんだ。危険にも授業中でさえ緑の顔を見ると、意思とは裏腹に身体が反応して困ったものだ。

さらに、この時やつと男女の身体的構造・仕組みを知る事となった。保健体育の教科書に始まり、エロ本、アダルトビデオから医学書に至るまで徹底的に調べ上げて、知識そのものを頭にインプットさせたのだ。ここに来てようやく、昔聞いた花の話が人間にも関係深かった事を知り、「既に五歳の時にわかっていたのか」と苦笑したものだ。

小学生編その2

さて、ファーストキス以来、私と緑の関係は少々進展した。二人きりで会う毎に、彼女の口唇を求める私。彼女を愛しているのかどうか、そんな事はどうでも良く、一種の肉欲的行為としてキスがしたくて仕様がなかった。そんな事は露知らず、私に口づけされてウツトリとする緑。そして相変わらず

「私の事好きだよね？」

などと聞いてくる始末。当然私も

「勿論さ」

と如何にも本気らしく答えていた。騙しているつもりはないのだが、彼女が思う程、私の中には精神的な愛情はなかった。

緑とするキスは段々と激しいものになっていった。最初の頃は口唇を合わせる程度だったのに、増大する私の欲望は抑制が効かず、その内に彼女の口中を貪り吸うようになっていた。最初、その行為をととても嫌がる緑だったが、

「大人はこうやってキスするんだよ」

と説得混じりに言くと、大人に憧れる彼女は素直に受け入れるようになった。こうして私達は、会う度毎にデープキスを交わすようになった。彼女も恥じらいながらも段々と情熱的になり、こちらを喜ばせた。

小学生にして、らしくない行為を繰り返す内に（もつとも昨今は早熟な若者が多いのでこんな事大した事ではないのかもしれないが）、七年目の春が来て、我々は卒業式を迎えた。その卒業式は何事もなく退屈なまま終了し、私達は小学校から去る事になった。この日はいつもだらしのない母も正装して、私の様子を見に来ていた。正装してもやはりそのド派手さは人目を引くようで、周囲の注目の的となっていた。

帰り際、私と緑は屋上で二人きりになった。服装は人の気持ちに

働き掛けるもので、お互い初めての学生服姿は、気のせいか大人びたように感じた。

「康介君、私達中学に行っても一緒だよな？」

緑は、小学校卒業で私達の関係にまで区切りがついてしまうのではないかと心配していたようだ。

「ああ、当たり前だよ。俺は緑の事好きだもん」

私はいつものように歯の浮くようなセリフを吐いた。「勿論だ、まだキスしかしていないのに別れられるか！」といった厭らしい思いが私の中に渦巻いていた。小学生ながら知識だけはいっぱしに豊富な為、大人びた性行為を内心は求めていたのだ。いや、そうでなくとも「穴があつたら入りたい」というのが、若い獣の性ではないだろうか。

「嬉しい…」

そんな心の奥底も知らず、緑はただ言葉だけを信じて擦り寄つて来た。それを抱きとめ、いつものようにキスをする。私の舌が彼女の口の中に吸い込まれていく。

「ん…、くっ…」

今や彼女もすかさず反応し、舌を絡ませてくる。稚拙ながらも、必死そうなその顔を見ていると、私の興奮も増大してきた。今日はキスだけで終わる気はなかった。卒業記念(?)という事で、彼女の背中に回していた手をその胸に持つていく。

「えっ！」

胸を触られた途端に顔色の変わる緑。しかし、私は構わずにキスを続けながら服の上から彼女の胸に触れて、それを揉んだ。大きさはそれ程でもない胸にブラジャーが張り付いている事が指先で感じ取れる。突起物が二つ、山の頂上のように盛り上がるの先端に付いているのも確認した。嫌がる素振りを見せる彼女だが、私はそれを無視して行為に耽った。存分に胸を攻撃して幾分満足した私は、彼女の身体から身を離れた。

「ひどい…。康介君ってエッチなのね…」

恥ずかしさからか、頬を真っ赤に染めて緑が言う。その目は多少非難の色を含んでいるようにも見えた。

「ごめんよ。でも緑の事が好きだからするんだよ。好きでもなかったらこんな事はしないさ」

私はまた口からでまかせを言った。まさか「胸を触ってみたかった」なんて言う訳にもいかないし、こうでも言わなくては緑を繋ぎ止めておけないだろう。すると彼女はその言葉を信じたのか、納得したかのような表情になって

「そう……。だったら、許してあげる」

とあっさり陥落した。緑は心底、私の愛を求めているらしかった。ちよつとした言葉一つですぐに私の言う事を信じた。彼女にしてみれば、今の行為は愛の確認作業とでもいう事になるのだろう。

その後、私達は仲良く手を繋いで小学校最後の帰り道を帰宅した。先程の事は二人の口から一切出て来なかった。私は深入りして緑の気分を害するのを恐れたし、緑は口に出すのも恥ずかしいという心持ちだったのだろう。そんな訳で下校中は、小学校時代の思い出話に花を咲かせていた。数分で緑の家に辿り着き、彼女が中に入るのを見送ると、私も自宅へ向かった。

「まあ、お帰りなさい。卒業おめでとう！」

家に戻ると、卒業式の時とは打って変わったラフな格好で母が出迎えてきた。この晩は、久々に母子二人で外で豪華な夕食を取り、その帰りに中学入学の為の買物をした。母はいつものように私に甘い顔を見せ、学校で必要な物以外にも様々な物を買ってくれた。女手一つで私を育てて来たとおあって、余程息子の卒業が嬉しかったらしい。母は私以上に卒業を祝っている節があった。

その夜、外から戻り寝支度を済ませた私は、昼間の緑との行為を思い出し、部屋で自らを慰めた。この行為で蛙にならないおたまじやくしがたくさん死んだ……。でも私は死などとは無縁に成長する、中学生になるのだ。

中学生編その1

卒業式から数日が経ち、私は中学に入学した。約束事のように入学式が行われ、クラス分けが発表された。私と緑は違う組に別れてしまった。

「バラバラになっちゃったね…」

非常に残念がる緑。確かに私も少しばかりガツカリはしたが、大して気になる程でもなかった。むしろ「私のこと好き？」という愛情の確認作業が減るだけ鬱陶しくないようにも思えた。勿論、彼女に調子は合わせておいたが。

勉強面では中学に上がろうと、成績に変わりはない。既に中学程度の学問はほぼ頭に入っていたからだ。入学後、初めて行なわれた中間試験では、いつも通りにオール満点で学年トップの成績を収め、これで私の存在を知らなかった中学校の教師達も驚きの眼差しを向けてきた。教師、生徒達はすぐに「こいつが噂の天才児か！」という顔つきで私を見るようになった。

中学で私はテニス部に入部した。元々、運動するのは好きだったし、『根性』という言葉があまり好きではなかったので、比較的それとは無縁な気がしてテニスという競技を選んだのだ。とはいえ、一年生は最初は球拾いや基礎トレーニングばかりやらされる。私もランニングや腕立て付け・腹筋などよくこなしたものだ。しかしこのままでは『根性』論に屈するではないかと感じ、私は先輩が一年生に試しに打たせてくれた機会に実力を発揮し、すぐにレギュラーの座を獲得した。新入生では私だけだった。

そんな中、緑との関係は小学校の卒業式から平行線を辿っていた。キスをして舌を入れ胸までは触れるのだが、そこから先が拒まれてしまう。さすがに無理強いは出来ないのので、我慢して仲良くする事に努めていた。その為、欲求不満がつのり、家で紛らす回数は相当なものだった。毎日のように勃起して噴出している事に「自分は変

なんじゃないか？」と思いましたが、結局止めることは出来ず、定例行事のように自慰を繰り返していた。「マスターベーションをし過ぎると頭が悪くなる」などという迷信が巷に広まっているが、それが嘘だという事を己れの身で以て証明した程だ。

そんな一学期も半ばのある日の事だった。私はテニス部でレギュラーになったので、遅くまで練習に加わる事となり、合唱部で練習が早く終わる緑とはバラバラに帰る日々が続いていた。テニス部の練習は六時過ぎに終了し、皆が部室で着替えをする中、一人だけ一年生の私は先輩に挨拶を済ませて先に帰ろうとしていた。一人で正面玄関前まで来ると、廊下の向こう側の薄暗い中にポツと明かりが灯っているのが目に付いた。どうも体育館の方から漏れているらしい。気になった私は明かりの方へ近付いた。

出所は女子更衣室からだった。辺りに人は全くおらず、ウチの部の先輩も帰って行くのが窓から見えた。こうなると抑えがたい好奇心が胸に込み上げてきて、足を更衣室に運ばせる。何であれ、解法出来ない問題があるのは面白い事ではない。

明かりが漏れているのは、入り口の扉が壊れて少し隙間を作っているせいだった。私は周囲に本当に誰もいないのを確認すると、こっそりと隙間から中を覗き込んだ。そこにはやはり女生徒がいた。

彼女は着替えの最中で、ちょうどレオタードのようなものを脱いでいる所だった。ブラを付けていない乳房が顕わになっている。顔を見てピンと来た。確か我が校唯一の体操部員、三年の西沢先輩だ。優れた体操のセンスを持ちながら中学では部員が集まらず、一人でやっているのだ。容姿も良く、校内でも人気者という噂の人だ。

私は視線を集中し、先輩の着替えを堪能した。バレたらただでは済まないのはわかっていたが、衝動を抑える事は出来なかった。興奮で下腹部が熱くなってきた。先輩の裸は美しかった。ちょうど少女から大人になるうとしている段階であるのが、一目でわかる。

数分で着替えは終わった。それを見て取ると、私は何事もなかったかのようにその場を離れ、帰途に就いた。一人で帰る頭の中は、

西沢先輩の裸体で埋め尽くされていた。やはり生で見る裸は本やビデオとは一味違う。それも覗き見という異質な行為による為、私に鮮烈な印象を残した。当然、帰ってから西沢先輩の裸を考えつつ、一人の世界に入って行く事になった。この日は興奮で、四度も勤しんでしまった。一度の射精で約三億の精子が出るそうだから、西沢先輩によって十二億近い精子が殺された計算になる。

その日から私は、部活で帰りが遅くなると決まって体育館の女子更衣室を覗いた。西沢先輩もいつも一人で同じくらいの時刻まで練習していた為、遭遇確率は相当に高かった。先輩の胸はレオタードからもわかるように発育盛んで大きく、さらにピンク色をした乳首が私の目を引いた。とにかく綺麗で美術品のようだった。まさに不純な心で綺麗な物を見ようとしていた訳だ。覗きを重ねる内に、その不純な心はある悪知恵を生み出した。

いつものように部活の居残り練習で帰りが遅くなった日、私は先輩達と別れるとまた女子更衣室へと向かった。相変わらず体育館は真っ暗でガラーンとして誰もいない。そのまま明かりの漏れる更衣室を覗くと、毎度の如く西沢先輩が脱いでいた。私はすかさず、カバンからある物を取り出した。

それはハンディタイプのビデオカメラだった。新しい物好きの母の習性がこんな所で役に立つとは。そのビデオカメラも、買って少しばかり使った後は、飽きて部屋の隅に放り投げられていた物だった。従って母には持ち出した事など全く気付かれないだろうし、学校で持っている事さえバレなければ何一つ問題はなかった。

カメラは西沢先輩の生まれたままの姿を写して回っている。何も気付いていない彼女は、一人で鼻歌を歌いながら衣服を着けていた。全て身に着けたのを確認すると、私は一部始終を収めたカメラをカバンにしまい込み、早々にその場を退散した。

ワクワクしながら帰宅するとまだ母は帰ってきておらず、邸内は暗闇に包まれていた。私は電灯を点けると、用意されていた夕食には目もくれず、真っ先にカメラで録画したものをVHSのビデオテ

ープにダビングした。終わると元のマスターテープは万が一の事態を考えて破棄した。

全ての作業を終えた私は、自分の部屋に閉じ籠もってビデオを再生する。画像はかなり良い状態で、西沢先輩の桃色の乳首までがボヤけなくしっかりと録画されていた。早速この盗撮ビデオを見ながら行為に浸った。頭のイメージの中では、目の前の西沢先輩と抱き合っていた。

終えた後、私の中には満足ではなく、大きな虚しさだけが残った。いつもの虚脱感が心にまで影響してくるかのようだった。

「何をしているんだ俺は……」

犯罪まがいの行為に及んで、なおかつ自慰に励んだ事が、今更ながらに情けなく思われた。噂の天才児ともあるう者が、誰も知らない陰ではこんな事をしているのだ。そう考えると世の中が、人をうわべだけで判断し、ロクに正当評価しないものに見えてきた。私なんて表面上は聖人君子だが、裏では地獄行きを命じられてもおかしくない罪人のようだ。

しかし、これで世の中全てが嫌になるという事もない。むしろ都合のいいものと私には思えた。多少の罪悪感が残っただけの事である。そういう意味では、この頃の私はまだ罪悪感があるだけマシだったのかもしれない。

私は覗き行為を経て、より一層性への執着が強くなった。家で一人でするのは違う、本当の快感を味わいたくて堪らなくなってきたのだ。勉強も部活も友人関係も、何一つ私の心を満たしはしなかった。私は決意した。

「緑を抱こう！」

中学生編その2

期末テストが二週間前に迫った日曜日、部活も休止になったので私は緑とテスト前の最後のデートをした。その日私達は隣町に新しく出来たアミューズメントパークで遊んでいた。様々なアトラクションを二人で楽しんでいたが、ふと『ホラーハウス幽霊学園』というお化け屋敷的なコーナーが私の目に止まった。

「ねえ、これ入ろうよ」

「えーっ、何か怖そうよ、これ…」

私の提案に緑は少々尻込みしていた。確かに「リアルサウンド」

「格別の恐怖をあなたに」などと銘打っており、少女を怯えさせるだけの迫力を醸し出していた。しかも結構な行列を形成して、人気の高さをうかがわせた。

「大丈夫だつて、こんなに人がいるじゃないか。行こう！」

「う、うん…」

私は半ば強引に彼女の手を引いて、並んでいる列に加わった。

二十分程待っていると、ようやく私達も入館出来た。たくさんの人間が並んでいても、入館するのは個人単位ペアやグループなので、他の観客とは離れて私達二人だけが中に入った。

「康介君、私怖い…」

入った直後に闇に覆われ不気味な雰囲気漂い、早くも恐れを抱く緑。そしてギュツとしがみ付いてきた。確かに今すぐ何かが飛び出して来てもおかしくない状況ではあった。が、しかしこの時の私は、お化け屋敷とはまるで別の事を考えていたのだ。私の頭には、とにかく緑を抱く事しか浮かんでいなかった。このお化け屋敷に入ったのも、恐れおののく彼女に自分の強い面を見せ、事を上手く運ぼうとする為の姑息な手段に過ぎなかった。

「キャッ…」

悲鳴を揚げて私の身体に顔を押しつける緑。観客を驚かそうと、

次々と仕掛けが用意されており、その度に彼女は怯え、私にぴったりとくつついた。普段から冷めた物の見方をしている私は、作り物では一向に驚くことが出来なかった。そんな訳でまるで恐怖を感じる事なく、身体を密着する緑の胸に触れたりして、別の意味でお化け屋敷を楽しんでいた。同時に彼女に向かって「俺はまるで怖くない、だから安心するように」と言って信頼感を深める事に努めた。

大人が趣向を凝らした下らぬ仕掛けも全てが終わり、私達は退館した。緑は本当に怖かったようで、出た後もしばらく私に寄り添っていた。数分後やつと落ち着くと

「康介君つてとっても勇気があるのね。頼りになるわ」

と私の度胸に感心した風に言った。この時点でムードは悪くない、自分に追い風が吹いていると思った。そして次に私の口からでたのは、

「ねえ、ウチに夕食食べに来ない？俺がご馳走を作ってあげるよ」というセリフ。夕暮れも迫っていたので、ちょうどいいタイミングであった。

「えっ、康介君が料理？」

「ああ、結構美味しいんだぜ。母さんがいない時にいつも作っているからね」

「へえーっ、凄ーい！じゃあ行くわ。どうせウチには夕御飯は外で食べてくるって言うてあるから」

緑の家では、私達の付き合いは容認されていた。評判の天才と付き合っているという事で、彼女の両親は信頼しきっていたのだ。この辺が、世間体の良さの得する点である。素行が悪いと見做されればこつも上手くは行かない。

「よし、じゃあ行こうか」

私は緑の手を引き、己れの欲望の巢窟へ引つ張り込もうとしていた。すぐに私達はアミューズメントパークからバスに乗り、話をしている内に近所まで辿り着いた。

「よく考えてみたら私、康介君の家の中に入るのは初めてよね」

家の前まで来て、緑が呟いた。

「そういえばそうだな。俺が緑の家にお邪魔したことは何度かあるけど…」

確かに私が彼女を家に招くのは初めてだった。というのも、私は自分の母親を他人に見せる事を極端に嫌っていた。男遊びが好きで派手な格好をしている母を人目にさらすのは、とても恥ずかしかったのだ。姿を見せるくらいならともかく、会話させて天才児たる私の母が無教養である事を周囲の知る所とはしたくなかった。だから緑も母に会った事くらいはあるが、大して話もしていなかった。私が今までそうならないようにしていたからだ。

「さあ、どうぞ」

私は玄関の鍵を開けると、緑を招き入れた。

「お邪魔します」

挨拶をして靴を脱ぎ、邸内に入る緑。しかし返事は返って来なかった。当たり前である。母は友人（友人というのも怪しいものだが）と泊まり掛けの旅行に出ていた。勿論、私が彼女を家に誘ったのはそういう計算があつての事だった。

「ねえ、お母さんいらっしやらないの？」

「うん。友達と旅行に行っているんだ。うるさいのがいなくてちょっといいよ」

「うん…」

緑は安心と不安が同居したような表情で答えた。私の母がいなくて落ち着くという安心、いなければいけないで私に厭らしい事をされないかという不安、そのせめぎ合いがあるのだろう。しかしそんな事は知ったことではない。

「よし、じゃあテーブルに座っていてよ。これから腕によりを掛けて料理を拵えるから」私は　そう言うなり、緑を食卓に待たせて台所へ入る。そして最近覚えたての『あさりのボンゴレスパゲッティ』作りに取り掛かった。

しばらく調理に没頭していると、緑が台所まで来た。

「康介君、私にも何か手伝う事ないかしら？」

「いいよいいよ、お客さんなんだから座って待っててよ」

「でも、待っているより一緒に作った方が楽しいでしよう？」

「まあ、それはそうだけど」

結局問答の末、彼女にも手伝ってもらい、サラダ作りをお願いする事になった。

「緑は優しいなあ」

「まあ、そんなことないわよ」

と言いながらも、緑は皿に盛り付けてあるトマトと同じくらい頬を赤くしていた。

料理が完成した。あさりのボンゴレと生野菜のサラダがテーブルに並ぶ。

「いただきます…」

「ちよつと待って！」

私が緑の声をさえぎる。そして怪訝そうな顔をしている彼女を尻目にキッチンへ戻り、食器棚からグラスを二つ掴み、さらに冷蔵庫から瓶を一本取り出した。

「ごめんごめん、飲み物も必要だと思ってね」

「ちよつと康介君、飲み物ってそれ、お酒じゃないの？」

彼女の指摘通り、私の持ってきた飲料は紛れもなく白ワインだった。

「そうだよ、白ワインさ。あさりのスパゲッティにはこれがよく合うって言うからさ。母さんがいつも飲んでいるやつを取ってきたんだ」

私は不安げな緑の表情を無視するかのように平然と云つてのけた。そんな…、私達まだ中学生よ。お酒なんて飲んじゃダメよ」

彼女は未成年の飲酒に罪悪感を覚えるようで、必死に反論してきた。

「ハハハ、別にそんなに大量に飲もうって訳じゃないよ。こっちは

最初の一杯を二人で乾杯して飲もうって思ってるのにさ。俺だって今までに一度も飲んだ事なんてないし、大人の雰囲気味わってみたいだけだよ」

私は自分が酒を持ち出してきた訳を語り、緑を納得させる。しかし、これは真つ赤な嘘だった。要は、緑を抱くという目標達成への手段に過ぎなかった。彼女が遺伝的に酒に強いのか弱いのかは知らないが、もし酔ってくれば事の運びが楽になるのはまず間違いない。しかも私自身は「一度も飲んだ事がない」なんていう事はなく、普段の夕食時に母の相手をして軽く飲んでおり馴れていたのだった。「それじゃあ、改めて乾杯！」

二人のグラスがぶつかり音を立てる。緑は最初の一口を、如何にも苦いという顔をして飲んだ。私はそれを横目に平然として、グイツと喉ごしに流し込んだ。

「ああ、ワインって美味しいんだね」

私が言うと、

「う、うん……」

返事に困りつつも、私の手前、同意を示す緑。その困ったような表情がまたそそった。

「さあ召し上がれ」

私はなるべく緑の気分を悪い方へ持つていかないように、料理を勧めて気を逸らそうとした。二人の手がそれぞれフォークを手にして、スパゲッティの皿に延びる。フォークで丸められたパスタは次々に緑の口の中に吸い込まれていく。

「美味しい！康介君って本当に何でも上手なのね」

ワインの苦さなど忘れてしまったかのような表情で料理の出来を褒める緑。

「ありがとう。褒めてもらえて嬉しいよ。実は自信がなかったんだ」「そうなの？本当に美味しいわよ」

彼女の顔に嘘はなかった。目や口への料理の運び具合がそれを物語っていた。

私はスパゲッティとサラダを食べつつ、ワインの杯を重ねた。緑もそうする事がマナーであると感じたようで、私が次々に勧めるのを我慢しながら受けていた。全て食べ終わった頃には彼女の頬は真っ赤になっていた。

「大丈夫かい？」

自分で杯を勧めておきながら、心配する素振りを見せる私。自分でも卑劣な奴だと思った。だが背に腹は変えられない。

「うん…。何か私、お酒に酔っ…ちゃったみたい…。ポワーンとして気持ちがいい…」

彼女の目はトロロンとして潤み、舌も若干濡れつが回っておらず、明らかに酔っている状態であった。

「何だかフラフラしているね」

「うん…、何か夢を見ているみたい…」

「じゃあ俺の部屋でもう少し休んでいきなよ。ごめんね、ワインなんて飲ませちゃって」

「ううん、いいの。料理も美味しかったし、康介君と乾杯なんかして、私、大人になったような気分だったわ」

緑は酒に酔っていい気分になっているせいもあってか、嫌悪感などまるで見せる素振りもなかった。それよりも「大人になった気分」というセリフを耳にして、私は内心興奮していた。これから本当の意味で「大人になるう」と目論んでいたでその言葉は刺激となつて私の中に響いてきた。

「わあーっ、綺麗な部屋！」

私の部屋に入るなり、驚きで声を揚げる緑。男子の部屋なんてみんな汚いものという先入観があったようで、片付いていた私の部屋に感心したらしい。

「そこに座って休んだらいい」

私は彼女にベッドの上に座るように勧めた。彼女が座ったのを見届けると、自身は机に備え付けの椅子に腰掛けた。

「今日は楽しかったよ。テスト前に二人で遊びに行けて良かったよ」
「ええ、私も。康介君と二人でいる時が一番楽しいわ。優しくて、
頭もいいし、運動も出来るし、料理までするんですもの。一緒にい
て本当に頼もしいわ」

彼女の顔は陶醉するかのよう私を見つめていた。

「緑…」

私はベッドに近付いた。そして彼女の隣に座る。

「あつ…」

そのまま彼女の両肩を掴んでキスをする。最初は口唇を合わせた
だけで、すぐに触れた部分を離してその目をじっと見つめる。

「康介君…」

潤んだ目で私に視線を返す緑。

「俺は緑が好きだ！」

「嬉しい…」

私はいつものようにくさいセリフを吐き、彼女の顔が紅潮するの
を見て取ると、強く抱き締めて激しい接吻に移行した。

「んっ…」

二人の舌が互いの口の中でとろけ合う。生暖かい彼女の口の中は
少し酒の匂いがした。その臭さに近い匂いが私をさらに興奮へと導
いた。清楚なイメージを持つ緑の恥部を見た思いがした。気持ちが
盛り上がってきた私は、両手を相手の胸に移動させる。

「いやあ…」

嫌と言いながらも最近の緑は、ここまでは抵抗を見せなくなつて
いた。まだ膨らみかけのつぼみのような胸をいじくり回すと、彼女
の身体はその都度反応を示す。

「康介くん…」

緑は感じているようで、甘ったるい声で私の名を呼ぶ。「今日は
やるしかない！」と思った私は口唇を吸い、胸を揉みながら、ベッ
ドに彼女の身体を押し倒して服を脱がせにかかった。

「ダメッ！」

予想はしていたが、彼女の抵抗が始まった。自分の衣服を押さえ付けて、私の手を払い除けようとする。しかし酒が効いているのか、快感が強まっているのか、その抵抗力は弱かった。

「いやっ、やめて康介君」

私は彼女の願いを聞き入れる事なく、上半身の衣服を取り去った。緑の小さくて可愛らしい乳房が初めて私の前に現れた。

「いや…、見ないで」

私に生の胸を見られる事が恥ずかしくてたまらないようで、彼女は両手で顔を覆った。しかしそのせいで、肝心の部分が丸見えになった。

「康介君…、もうやめて」

「嫌だ」

「何でこんな事をするの？」

「いつも言っているじゃないか。緑が好きだからだよ。俺は緑が好きだから、抱きたくて仕様がなんだよ。だから緑の心と身体、その両方を愛したい！」

抱きたいという事以外心にもない言葉が、私の口から流れるように発せられた。抱く為に、私も必死になっていた。それを聞いた緑は「でも、私、恥ずかしい…」

と胸を隠すように背を向けて言った。

「恥ずかしくなんかいいよ。だったら俺も裸になるよ」

言うとは自分の上半身を包んでいた物を全て取り去った。そして有無を言わず彼女を抱き締めた。互いの肌が触れ合って妙に心地良い。彼女の膨らみの先端が私の胸に当たっているのを感じる。ただ欲望だけが増幅していく。

「緑、もう我慢出来ない。いいだろう？」

「う、うん…。でも優しくして…」

ようやく強引ながらも彼女の承諾を得ると、剥出しになったばかりの乳房を揉み始めた。正面にある鏡に自分の行為が写るのが見えた。その表情は何とも卑しいものだった。これが大人になる人間の

顔なのだろうか？こんな物を見ては嫌気が差さないでもない。だが、もう欲望に歯止めを利かせる事は不可能だった。

「はあっ、はあ、ああ…」

緑が段々とあえぎにも似た声を発するようになってきた。それを聞いてさらに血がたぎってきた私は、さらに激しく彼女の胸を攻撃する。

「いやあっ、そんなのダメっ！」

嫌がる彼女を無視して、私はその乳首を口に含んだ。そしてそのまま胸全体を舐め回す。次第にベッドに仰向けに横たわる彼女に、私が乗るような態勢になっていた。緑は嫌悪感を示しながらも、身体は正直でくねっていた。身も心も最高潮に達していた私は、ついに彼女の下半身に指を延ばした。まずは赤いスカートを脱がせる。すると純白の布地が眼前に現れた。そこには彼女の体液が染みつき、濡れてさながら地図でも描いている様を思わせた。

「もうダメ…。恥ずかしくて死にそう…」

「大丈夫だよ」

私は一声掛けて少しでも緑を安心させようとした。しかし彼女もはや恥ずかしさの極致であるようで、何を言っても通じそうにはなかった。仕方なしに私は己れの欲望の赴くままに、下着の上から濡れた部分に触れた。

「ひいっ…」

殺される寸前のニワトリのような声を揚げる緑。私は養鶏場の主人にでもなった気分で彼女の大事な部分を擦りあげる。まるで大事に卵を取り上げるかのようにであった。が、

「痛いっ…」

緑はニワトリどころか受刑者にも等しい悲鳴を揚げる。さすがに私も気が引けてきた。彼女が嫌がるのに加えて、どうやって触れて良いのかわからないのだ。おずおずともう一度手を延ばす。そして自分を奮い立たす意味でも思い切ってショーツを引き剥がした。

「いやっ…、見ないで…」

私の目が食い入るように緑の股間に集中する。だが実の所、怯えていたのは緑よりも私の方だった。うつすらと生えた陰毛の奥の秘境をどう取り扱っていいのか、判断がつかなかった。先程、触れた時の緑の「痛い」という叫びが、触れ方を悩ませた。

天才でもわからない事があると悟ったのはこの時が初めてだった。私は半信半疑のまま、中指を洞窟探索へ駆り出した。全く見えない闇のそこで探険を始める中指。地底湖でも見付けたかのように、グチュグチュと濁った水が湧き出てくる。

「いやああ…、ああ…」

声を出す緑の身体が蠢く。太ももが何度も閉じるような動きを見せ、覗き込んでいる私の頬に当たる。それでもまだ私は焦っていた。こんな事態は今ままで初めての事だった。何処をどういじれば彼女が気持ち良くなってくれるのか、それを掴みきれていなかった。欲望だけが先行して訳がわからなくなってきた私は、前戯もそこそこに素っ裸になり緑に向き直った。

「こ、怖い…」

いきり立った私の欲棒を見て、恐れを成す緑。しかし、もうそんな事を考える余裕はなく、彼女の身体を強引に引き寄せると無理矢理に合体した。今までに味わった事のない快感が全身を走る。閉所に押し込まれた己れの分身がさらなる暴利を貪ろうと大きさを増す。

「痛ああいつ…」

私に貫かれた緑が悲鳴を超えた叫びを揚げる。彼女の花は破られて血が溢れ出しており、目からは痛みに耐えられないようにで涙を流していた。それを見て思わずハツとした。さすがに良心が咎めてきて、ここで行為をストップする他ないようだった。

「ごめんよ」

私が声を掛けても緑は何も応えなかった。

行為を中止した私達は互いに服を着た。緑は痛みか怒りか、終始無言であった。私は家まで送るつもりだったが、彼女は一人で帰れ

ると言い、去って行ってしまった。

一人家に取り残された私は、己れの性技の未熟さと中途半端な結末による欲求不満で一杯だった。特に性器を目のあたりにしての不得手は自己嫌悪を引き起こした。全然違う分野ではあるが、世の学生が予習復習する訳がようやくわかったような気がする。

「この日の反省を次に生かさねばならない、そしてその為にはさらなる研究が必要だ」

とこの時本気で思った。何もわからず、無理矢理行為を迫るよりは、緑にも気持ち良くなってもらった方がこちらの気分もいい。

ただ、緑を裸にして一瞬とはいえ身体を結合させた事は、ある種の征服欲を満足させてはいた。そしてしばらく頭から場面が離れなかった。その晩から私の自慰行為は、欲求不満を満たすかのように全て緑をターゲットに行なわれた。小振りな胸、薄い毛に覆われた性器を思い出すだけで高揚した。だが、そうすればする程、より一層本物の緑を抱きたいという気持ちが強くなった。

中学生編その3

翌日から学校へ行っても、頭の中には昨日の行為の失敗と次回の成功の絵図面しかなかった。緑は怒っている風ではなかったが、テストが終わるまで話さえ応じてくれる気配はなく、私の欲求不満だけがたまる一方だった。

毎日そんな事を考えている内に期末テストが始まった。最初の科目は数学。私にとっては頭の中で計算が全て行なわれ、無駄なく短時間で終わる事の出来る科目であった。

「よし、それじゃあ配るぞ」

洒落のような名をした担任の教師、松田松吉の声と共に、前方の席から答案用紙が送られてきた。松田は教壇の前に立ち、用紙が全員に配布されたのを見届けると、時計を見やった。

「はじめ！」

教室内の生徒全員が一斉に裏返しの用紙を表に開く。私も同様の所作の後、さしあたって吉井康介と名前を記入した。そして答案を覗き込む。最大公約数や最小公倍数に纏わる問題が並んでいるのが目に入り、次の瞬間には頭の中で計算が行なわれる…筈だった。

が、頭には数字と共に別の物が浮かんできていた。それは緑の裸体だった。次第に頭の中の緑は身をくねらせ、快感に浸っている仕草を見せる。ついには脳の中が埋め尽くされ、私に計算をさせようとしなかった。テストの答えを求めようという気持ちがあるで湧かず、試験中なのに頭より下半身の方が意欲的な状態になっていた。

「あと十分だ！」

松田の声が教室に響いても、それは私の心までは響かなかった。心と身体がテスト以上に緑のヌードに支配されていた。そして驚くべきことに、手が自然と鉛筆からペニスに移動した。ポケットに手をつっ込み、その上からつつい刺激を与えてしまう。もはや問題を考える余裕などなくなっていた。無意識にポケットの中の手が動

きを速める。

「よし、やめ！」

終了の合図がなされた。ついに私は一問も答えを書く事なく、白紙で答案を提出した。しかし、そんな事はまだどうでもよかった。終了と同時に私は白濁の液体を産出してしまったのだ。

まさかテスト中にこんな事が起こるとは…。私は慌てて教室を出て、トイレに駆け込んだ。体液で湿った部分を水で擦り取り、匂いを封じ込める。それでパンツがびしょ濡れになってしまったのは仕様がなかった。バレたら恥曝しもいいところだ。濡れた下着が張り付き気持ちの悪い感触に支配されたまま、私は教室へ戻った。

次の科目が始まって、状況は変わらなかった。相変わらず答えの代わりに緑の裸体ばかりが思い浮かんできた。最初は気持ち悪かった濡れたパンツも、その冷えが心地よさを生み、再び衣服の上から性器を擦らせた。さすがに二発目を出すことはなかったが…。

一日目が終わって家に帰ってもするのは自慰だけ。翌日の試験も発射はせぬものの、結果は同じだった。結局、私はこの期末テストで答えを一つも記入する事無く、全教科名前以外は白紙で提出して終えた。

「吉井、どういう事なんだねこれは？」

案の定、全ての採点が終わった頃、担任の松田が私を呼び出した。彼は目の前に白紙の答案を並べて、大して怖くもない顔に精一杯の凄味を効かせてこちらを睨んでいた。本人は虎かライオンのようなつもりなのだろうが、こちらにしてみれば力バにしか見えないのが滑稽であった。私は笑いをこらえながら、何も答えなかった。白紙の本当の理由なんて言える筈もないし、その場をうまく取り繕う嘘も考えるだけ面倒な気がした。

「おい、人の話を聞いているのか？いくら君が天才だからといって、学校をバカにするような真似はいかんぞ！今回のような行為は学校に対する一種の反抗と受け取られても仕方がないんだぞ！」

「……」

私は俯いて答えない。

「いくら君が出来がいいからって、内申書というものがある事を忘れてもらっては困るなあ。こんな行為はマイナス点となるぞ！」

どうやら松田は私がわざと0点の山を築いたと解釈しているようだ。『天才児による学校批判』を行なったと思っているのだ。このままでは埒が明かない。そう感じた私は

「すみませんでした」

と平身低頭し、とにかく謝る事に努めた。どのみち言えない理由である以上、松田の思うままに任せておけばいい。

「そうか、非を認めるんだな？」

「はい」

私が返事をする、松田は犯人に泥を吐かせた刑事のように勝ち誇って、こちらを見下すような表情をした。

「まあ今回は体調不良だったという事で見逃してやろう。学校としても君のような天才児は大事にしていきたいみたいなんだね」

松田は、生徒にこんな事を言ってもいいのかと思われるようなセリフを吐いた。（偉そうに！私はお前の犬ではない）そう思ったが、怒るだけ無駄なのはわかっていたので、

「はあ」

と返事だけしておいた。

「じゃあ三日後に特別に追試を行うので、今度はちゃんとやってくれたまえ」

追試！まさかそんな特例措置が出るとは。伊達に中間テストでトップを取った訳ではなかった。私の実力が十分に教師達の間に浸透していたのである。

「失礼します」

私は挨拶をすると席を立った。奴が裁判官で私が被告のような説教はこうして終わった。私にしてみれば異例の追試という事で、優遇されるのが嫌な筈もなく、松田の大人げない態度だけを内心バカ

にしなから退室した。

三日後、松田に言われた通り、放課後に私だけの追試が行われた。さすがに私にもプライドがある。今回ばかりは無理にでも緑の裸体を頭から追い出し、問題に集中した。前日の夜にこれでもかという程、精力を放出したのが良かったのか、今回は厭らしい妄想が脳裏にチラつく事無く回答に専念出来た。頭は冴え、スラスラと問題が解かれていった。

採点結果はすぐに出た。全教科オール百点満点だった。この結果には、追試をやらせた松田を始め他の教師達も目を剥いた。

「吉井君、二度とこんな事のないように」

私は教師連中に口々に同じように言われた。奴らは皆松田と同じく、私がわざと0点を取ったと思っっているようで、好きで取ったのではないこちらとしては苦笑するしかなかった。

とにかく本来より十日程延びたが、ようやく期末テストは終わった。解放感に包まれた生徒の心は皆、長い夏休みに向いていた。斯く言う私も、その期間に行われるであろう事への期待に胸と下半身を膨らませていた。

そして特別追試が終わって、ようやく緑とゆっくり会う機会を得る事が出来た。解放された私達は試験終了後初の日曜日、街へ出掛けた。皆、試験が終わったのだろっ、騒ぐ若者達の人混みが形成されていった。

「康介君、久しぶりに二人で会えたわね」

緑の顔はにこやかで、怒っている様子は微塵もなかった。

「ああ、やっとテストが終わったよ。教師とモメて追試を受けさせられたんでね」

「そうだったの？でも康介君が追試だなんて信じられないわ」

「実はね、緑の事ばかり考えていて、白紙で答案を出しちゃったんだよ」

「嘘っ？」

「ホントさ。全部白紙で出したもんだから、教師達に学校批判かつ

て疑われちゃってさ」

「私の事考えていたって…、この間の事？」

「ああ、緑の事がいとおしくて仕様がなかった。テストの答えなんてそっちのけで、それしか頭になかったんだ」

私はいくらかの脚色を加えて緑に話した。それが功を奏したのか毎度のごとく彼女は喜びに震えていた。

「嬉しい…。この間は痛くて仕様がなかったけど…」

「ごめんよ…。俺が無理に抱きたいなんて言ったりしたから…」

私は緑の言葉を遮り、前回の件を謝した。既に目をウルウルとさせている彼女は、それを素直に聞いている風だった。この調子なら今は無理でも、抱く機会はすぐにでもまた訪れそうな気がした。

この日は久々に軽いキスだけで別れた。私自身は当然満足だったが、ここで下手に機嫌を損ねてさらに機会が遠くなっては困るので、我慢するしかなかった。その代わりに翌週の日曜日、夏休み突入後初の日曜日だが、二人で海へ行く事を約束出来た。私はこの約束を楽しみに、日曜まで気持ちを押さえ付けた。しかし身体だけは正直で、毎夜精力を放出する事でそれを鎮めるしかなかった。

中学生編その4

学校は一学期が終了し、夏休みに入った。夏休みとは言っても、平日は部活が続く。夏の県大会なども開催され、私は一年生ながら全学年混合の中、ベスト8入りを果たす活躍を果たした。しかしそれをも私を満たす事はなかった。私の頭は緑とのSEXしか考えられない状態であった。部活をして疲れれば疲れる程、試練を与えられているようで、なおさら渴望は増した。

夏休みが始まってからは母と顔を突き合わせる事が多くなった。部活も大抵は午前か午後のどちらかだったので、夜働く事が多い彼女は、私が家にいる時間に大概いた。当時、私は未だに母が何をやって金を稼いでいるのかよくわかっていなかったたので、この機会にそれを確かめてみたいと思った。最初、素直に尋ねてみたところ、「そんな、アタシの職業なんてどうでもいいじゃない」

と教えてくれる気配もない。こうなると知りたくなるのが人間の性というものだ。私は強硬手段に出る事にした。

午後に部活のあったある日、帰宅して母と夕飯を済ませた後、私は彼女の出掛けて行く跡をこっそりと尾ける事にしたのだ。家から最寄り駅まで歩き、そこから電車で繁華街へ向かう母。私も同じ電車に乗り込み、人込みに紛れて彼女の動向をうかがった。

電車を降りて繁華街に入り込んだ母は、飲み屋街を抜けて、その中でもいかがわしさ漂う通りに足を踏み入れて行く。そしてある建物の前で立ち止まり、中へ入って行った。それを見た私は怒りのような失望のような、それでいて納得がいくような気持ちになった。立て札には『性感ヘルス ニャンプー』と書かれていたのだ。母の金の出所がわかり、その場を去ろうとした時だった。

「お兄ちゃん、金玉用事ない？」

下品な顔のオヤジが露骨に誘いを掛けてきた。この辺りには母の入った『ニャンプー』以外にも風俗店が乱立しており、私は大人び

た風貌もあつてか、しきりに客引きに声を掛けられ袖を引っ張られた。何となくこの世の果てでも見たような気分になり、その場を走り去った。

この頃の私はまだ緑との肉体関係への興味は溢れる程だったが、性風俗というものに関しては嫌悪感を抱いていた（勿論、中学生という年齢的な要因もあるだろうが）。しかし母はその中の一員だった。それには少なからず衝撃を受けた。断っておくが、別に母が風俗店で働いていた事がショックだったのではない。私の性的執着の根源が彼女であるように思えたのがショックだったのだ。彼女の性欲や性の乱れが私に遺伝したと感ぜられて、思わず身震いする程だった。

当時、私は自分でも「おかしいんじゃないか？」と思うくらい、性への欲求が湧いていた。天才という要素が亡き父からの遺伝なら性欲は母からの遺伝なのだろうか？私はこの時初めて血の運命を呪った。あんな母の影響で、私も性的欲望の亡者なのかと思うとゾツとした。以後、母との会話はめつきり少なくなった。

とはいえ己れの性的欲望の性を呪おうにも、緑を抱きたい衝動に歯止めを利かせる程の力はなかった。待ちに待っていた夏休み最初の日曜日がついにやってきたのだ。海日和とばかりに晴れ渡った朝、私は緑を家まで迎えに行き、二人で最寄り駅まで歩いて、電車で海岸近くの駅まで向かった。

揺られること約三十分、海岸沿いの駅に到着した。わーっと一斉に乗客が降りて行く。皆、海が目的地だったらしい。その流れに沿って私達も海岸まで歩いた。まもなく日光で熱を帯びて焼けた砂浜が見えてきた。サンダルを履いていても下から強烈な熱気を感じる程だった。眼前に姿を現した海は青緑色に輝き、沖から寄せて来る波も緩やかで、絶好のコンディション。私達はまず海の家に入り、コインロッカーを借りて着替えを済ませた。

「かわいいなあ」

私はブルーの水着姿で出て来た緑を見ただけで、興奮を覚えた。

この時ばかりは嘘でなく、真実が口を突いて出た。青い布きれだけに身を包まれた彼女は、普段以上に魅力的だったのだ。胸の膨らみを見ているだけで、試験前の行為が思い起されてきた。

「もう、康介君ったら口がうまいのね」

緑は私の褒め言葉を受けて、照れ隠しなのか、軽くつついてきた。にこやかなその表情はまんざらでもないといった感じであった。

準備の出来た私達は、手を繋いでビーチへ走った。太陽がジリジリと照りつけて、身体が熱でとろけてしまいそうだった。暑さに耐えられんとばかりに海に飛び込む私達。まだ午前中でひんやりとした水が何とも気持ち良かった。一度全身を浸すと、私はふざけ半分で緑に向かって水を浴びせ掛けた。

「きゃっ、やったわね！」

緑はお返しに両手で水を飛ばしてくる。私達は幼児に戻ったような気分で水を掛け合った。そうする内に自然と足は胸まで浸かるくらいに深さまで動いていた。水掛けの方も深さに比例して段々とエスレートしており、私は凄い勢いで顔面に水をぶつけられた。

「やったな！」

そう言うのと、私は緑を追い掛けた。彼女は楽しげにきゃっ、きゃっとはしゃぎながら逃げる。二人の勢いで、海面がジャブジャブと音を立てて泡立つ。

「捕まえたぞ」

水を動くスピードは男の方が速かった。私は背後から緑の身体を掴んだ。

「あーあ、捕まっちゃった」

押さえ付けられた緑はじゃれ合いを楽しむかのようにだった。だがこの時、私には徐々に違った気持ちが始まっていた。何の気なしに彼女を捕まえたのだが、その柔らかな肌に触れた瞬間、沸き上がってくるものがあつた。こうなるともう幼児ではいられない。

「えっ！」

緑が驚くのも無理はない。私が後ろから抱きすくめたのだ。そし

て首筋に吸い付くと、水着の上から小振りな胸に触れた。

「ちよつと康介君！こんな所で…」

「大丈夫、俺達の身体は水中に隠れているから誰にも見えないよ」
抱いている事へのあまり説得力のない理由を言つて、彼女の言葉を遮る私。今まで何も食べる事が出来なかった猛獣のように襲いかかる。時折、沖から来る波に揺られて浮力で浮きながら、私は緑の肌に口唇を寄せて吸いつき舐め回し、手は性感帯と思われるあらゆる箇所をうごめいた。

「ああん…」

緑はテスト前の感覚を思い出してきたようで、徐々に気持ち良さそうに身体をよがらせてきた。狂暴な鮫が魚を襲うかの如く、私は水着の下にある乳房を鷲掴みにして握り締めた。私は心まで鮫になつていた。餌を喰らうように、乱暴に彼女の身体に刺激を加える。

「くうつ、ん…」

か弱い子犬のような彼女の声を聞いて、私は一層狂暴化する。手を彼女の下半身に持つていく。

「いやっ…」

緑は抵抗するが、男の力にはかなわない。私の指が水着の上から彼女の中に吸い込まれていった。

「うつうつ…」

海水とは違つた生暖かさが指に絡み付いてきた。同時に彼女の身体も水中とは思えぬ程熱くなつてきた。私自身も身体が火照つてくるのを感じる。その熱が私の頭から理性を蒸発させ、暴走を引き起こそうとしたその時、

「うわっぷ！」

私は頭から強烈に水をかぶつた。高い波が背後から押し寄せてきたのだつた。沖からの不意のビッグウェーブで私達の身体は引き離されてしまった。「いい所だったのに…」とも思ったが、むしろ海中で合体するなどという変質的な行為をせずに済んだだけ、波に感謝すべきかもしれなかった。

中途半端に身体を火照らされた私達は、その後砂浜に寝そべって肌を焼いた。緑がどう思っているかは知らないが、私の方は日光浴をしながらもムラムラとした気持ちで一杯だった。横に座って身体中に砂をこびり付かせている彼女の姿を見ると、欲望がムクムクと頭をもたげてくる。幸いに海水浴客は皆、海に入っていた為、周りに人間はいなかった。私はおもむろに右手を延ばすと、砂に塗れた緑の胸に触れた。

「えっ！」

いきなりの暴挙に驚く緑。私は構わず指を動かす。中指が砂粒と共に突起物に触れる。

「ちょ、ちよつと康介君…」

「いいじゃないか、誰も近くにいないよ」

私は先程の中断もあり、暴走寸前だった。

「でも、やめて。恥ずかしいの、こんな所で…」

相手に強く拒まれて、手の力も弱くなった。緑は途端に身を翻し、私を正面から見据える。

「わかったよ。ゴメン。でも、俺は緑を抱きたい！試験前、あんな状態のまま終わっちゃったし…」

「康介君、そんなに私を抱きたいの？」

「ああ、もう我慢出来ないよ。今にも緑を襲ってしまいそうだ」

およそ天才らしくない光景であった。自分でも恥ずかしくなるような言葉を次々に吐いていた。だが、狂い悶えそうな気持ちの吐露が良かったのか、次の瞬間緑は意外な言葉を口に出した。

「わかったわ。今夜何処かに泊まりましょう。そこで私を抱いて…。だから今はやめて」

「えっ！」

私は彼女の口から思わぬ提案を耳にして驚かされた。むしろ興奮より冷静に戻され、その提案の無計画性に気付いた程だった。

「けど、外泊はやバいんじゃないか？両親に叱られるんじゃない…」

私には後々に起こり得る出来事が頭に浮かび、彼女に尋ねた。

「大丈夫。友達の家に泊まった事にするから。直子あたりに協力してもらおうわ」

私はもう一度驚いた。意外にも緑は確固たる意志を持って、宿泊の提案をしてきたのだった。こうなると私も話に乗らない訳にはいかない。

「じゃあ、いいんだね？」

「うん…」

私は柄にもなく飛び上がらんばかりの気持ちになった。とにかく今日、緑と結ばれる事が出来るのだ。人間、期待が現実が変わった時程、喜ばしいものはない。

それにしても、よく緑が外泊などという考えを口に出したものだ。性行為はいつも嫌がっていたというのに…。だから私は喜びながらも内心訝しく思っていた。

中学生編その5

それからは約束通り、海にいる間は一切厭らしい行為を働かなかった。二人で沖まで泳いだり、浜で日光浴をしたりしながら、早く時間が経たないかと、そればかりを考えていた。それを知ってか知らずか、緑は

「もう三時ね」

とか

「陽が沈んできたわね」

など、やたらと時間を気にするようなセリフを呟いていた。彼女にとつては嫌な時間の到来を避けたいといったところか。

太陽が海に沈んでいき、空が夕焼けから暗闇へと移行しようという頃、私達は海岸を離れて道路沿いを歩いた。ほどなく旅館群を見付け、その中でも一番料金の安い所にチェックインした。私が背も高く大人びた風貌をしていたので、うまく受付を兄妹として誤魔化す事が出来た。緑はその前に同じクラスの直子を使って、家をだます事に成功しており、私の方は何時帰ってくるかもわからないような母親だったので、一泊してこようが何の心配もなかった。お金は、幸い私がたくさん持っていたので十分宿泊料は足りた。よって何の憂いもなく、宿泊出来る事になったのである。

旅館に入る前に海の家で夕食を済ませていた私達は、まず互いに風呂へ向かった。ラドン温泉で気持ち良かったが、日焼けた肌に湯が染みた。まあいい、温泉で気持ち良くなる為に来たのではないのだから。私は浴衣を着て着替えを終えると部屋に戻った。緑は先に上がったようで、部屋で座って待っていた。

旅館の女将の手によって、既に布団は敷かれていた。時刻はまだ八時を回ったばかりだったが、私は緑の手を引き、布団まで連れていく。彼女は若干緊張しているようで、手が震えていた。

「緑、いいんだね？」

私の問いに返事をする事なく、軽く頷く緑。私はそれを承諾の意思表示と受け取ると、まずは強く抱き締めた。

「康介君…」

私の名を呟いた彼女の口を私の口が塞ぐ。相手の口唇を割って私の舌が入り込む。互いの舌が絡み合い、同時に欲望の虜となった身体も絡み合った。緑の口の中を吸い、味わいながら、私の手は胸に股にと忙しく動き回る。今日の私はとにかく無我夢中、本能のままに動いていた。臆しても仕様がなない、欲望の赴くまま行動するしかない、と腹をくくっていたのだ。

「うっ、あっ」

いじくり回される彼女の身体は、まるでおもちゃのように私の意のままによじれ、身悶えていた。そして子供が着せ替え人形で遊ぶかの如く、緑の衣服を脱がし、生まれたままの姿にした。

「いやっ」

部屋は明かりを消していて暗かったが、それでも彼女の裸体は己れの眼にはつきりと映っていた。

「緑、かわいいよ」

私は珍しく本心からそう言った。事実、目の前の裸身は、果物のように小振りな乳房、薄く毛の生えた陰部、真っ白くつやつやとしてスラリと伸びた脚を備えて、満足に足るものであった。私はその素っ裸になった緑の股を丹念に愛撫した。

「いやああ、そこはダメ…」

ダメと言いながら、しつかりと反応する緑の身体。厭らしい音を立てて出入りする私の指。それを見ているだけで欲望の塊が膨張する。普段、自分と同じ学校に通っている少女にこんな事をしていると思うと、一層興奮は増した。そして自分の五感を総動員して快感を味わおうと、私は口をその部分に当てた。今までに触覚・視覚・聴覚は堪能している。残る嗅覚と味覚を感じ取るが故にだ。

「キャッ…」

恐らく今まで味わったことのないであろう異様な感覚に、驚き、

悲鳴を揚げる緑。私は気にせず、舌を使って彼女の内奥を舐めまくった。

しかし、不思議なものだ。何故、人間は好んでこんな事をするのだろう。緑の陰部を味わいながら、ふとそんな思いが頭を掠めた。これまで本能のままに動いていた私だが、しょっぱいような陰部の味に意外性を感じ（つまり、女は綺麗なものというイメージが私の中にあったのだろう）、多少の正気を取り戻していた。

はつきり言って、私達は汚い行為をしている。黴菌だの細菌だの影響を考えれば、決して清潔な行為ではない。だが、これが人間の生殖行為に繋がるものなのだ。どうして人はこんな所を舐めたく思うのだろう。わからない。やはり人間の性というものは奥が深い。どんなに複雑な方程式より難しく、無限の広がりを持って解法させようとしなない。あえて言うならば「舐めたいから舐める」としか答えようのない事だ。何だか考えるだけ無駄な気もしてきて、私は愛撫に集中した。

「はあん…、き、汚いよ。そんな所舐めないで…」

緑は恥ずかしさから、しきりに嫌がる素振りを見せるが、それは裏腹に身体は水を得た魚のように布団を泳いでいた。それこそ水から出たかのように、布団に愛液の染みも出来ていた。彼女の最も尊い部分を十分に愛撫したと判断した私は、自分の身体を包んでいた浴衣を脱ぎ去って、怒張した状態を誇示するかのように裸になった。

「緑、行くよ」

「うん…」

私は緑が返事をしたのを見て取ると、彼女の身体の中に杭を打ち込んだ。ずぶずぶつと肉が肉を招き入れ、包み込む。

「ああ…」

緑はもう前回とは違い、痛みは感じてないようだった。まだ緊張しながらもそれがわかってきた私は、遠慮なく自分の腰をグラインドさせた。

「わ、私達、一つになっているのね…」

身体の結合にある種の感動をさえ覚えているような緑。対称的に私の方は感動より快感を貪る野獣のようだった。

行為は終わった。私は当初の目的を果たした達成感と快感を味わい尽くした気分で、満足してグツタリとしていた。緑も演技でなければ気をやったようだった。

「ねえ康介君？」

しばらくすると、緑が呼び掛けてきた。

「何だい？」

男の性で行為後は少々面倒臭いという感もあったが、彼女の機嫌を損ねても困るので、私は向き直って呼び掛けに答えた。

「何で私が外泊OKしたかわかる？」

「いや…」

私もそれは気に掛かっていた。あれほど厭らしい行為をされる事を嫌がっていた緑が、よくも簡単に外泊を承諾、それも自ら提案したのは不思議でならなかった。私の頭でも答えは浮かばなかった。

「あなたのせいよ、康介君」

「えっ！」

「私、この間康介君の家で初めてあなたと一つになって…」

そう言うと、緑は突然黙りこくってしまった。私には何となく彼女が言い掛けた事がわかりかけてきたが、あえてそれを本人の口から言わせたくなり、

「それで、どうしたんだい？」

と済まし顔で聞き返した。

「あの時の…」

「あの時の？」

「ダメッ、恥ずかしくて言えない…」

言つなり真つ赤になって押し黙ってしまった緑。

「そんな、今更恥ずかしい事なんてあるもんか。俺も緑もお互いの

裸を全部さらけ出しているんだぜ」

私は緑の口から言葉を引き出そうと、少しでも彼女を安心させるようなセリフを吐いた。

「あのね、私…」

緑は一度口にしかけてまた黙り込む。

「緑、大丈夫だよ。何でも言ってくれよ」

「うん…。私ね、あの時あんまり気持ち良かったから…。一つになつた時だけは痛かったけど…。あれからずっと康介君に抱かれたいつて思っていたの」

「本当？そうだったの？」

私は薄々感付いてはいたものの、初めてそんな事を知ったというような顔をした。

「康介君がテストに手が付かなかつたつて言つてたけど、私もね、全然勉強する気が起きなかつたわ。康介君に会えない間はずっと一人で…。ダメ、もう恥ずかしい…」

今までに見た中でも最高潮に赤い顔になる緑。私も予想していた以上の答えに驚いていた。どうやら緑も、あれ以来自慰行為に浸っていたようではないか。まさか彼女もそこまで性欲の虜になつていたなんて…。聞いた瞬間、私の欲望がムラムラつと湧いてきて、緑を抱き寄せていた。その晩、私達は朝が来るまで愛し合った。

青少年として、中学一年としてはあまり考えられない行為を私達はしていた。いい年齢の大人ならいざしらず、中学生の私達が思春期とはいえ、ここまで性行為に浸っていて良いのだろうか？そんな思いも交錯したが、もはや歯止めが効く状態ではなかった。

翌日、家に帰った私達は何のお咎めもなく済んだ。強いて言えば部活をさぼってしまったので、先輩方に軽く説教されたくらいだった。

私は改めて性行為というものについて考えていた。何という神秘的の行為か。神がいて、人間が生殖行為によって繁栄していく事を決

めたのであれば、当初は一体どういう心境だったのだろうか？神はあのように男女が肉を密着させて舐め合い擦り合う姿を見て、楽しんででもいたのだろうか？

そして人類の生存にとって最も必要な行為にもかかわらず、常に世間の裏側で行われるという事にも不思議さを感じずにはいられなかった。陰部の行為だけに、社会の陰部で行われるのだろうか？大っぴらに行為の話をする事も許されず（中には所構わず話す奴もいるが）、陰でこそそとやるのは何故だろう。天才といえど、答えの見つからない世界、それが性行為だった。

そんな私の頭の中など何処吹く風、世間は何事もなく動いていた。私と緑は夏休みの間、平日は部活に出て、休みにはデートする状況が続いた。そしてその度ごとに互いの身体を重ねた。行為は最初こそ、母親のいない時の私の家などで行われていたが、次第に暗やみの公園や彼女の部屋などでもするようになった。中身も段々とエスカレートし、彼女を四つんばいにさせたり、自分の上に乗せたりして様々な体位が追求された。珍しく予習復習をするので、段々と勝手もわかってくるし、それは他のどんな事よりも己れにとっての勉強になるのだった。

一方、緑は最初は嫌悪感を示すのだが、徐々にこちらの要求を受け入れ、気付いた時には自ら腰を振っていた。私のせいで、彼女まで性交にハマりつつあった。多少の罪悪感はあるが自身の快感には変えられない。こうして部活と性行為に明け暮れて夏休みが終わった。

中学生編その6

学校は二学期が始まった。私にしてみれば、授業がある以外に特にスタンスが変わったという意識はなく、放課後に部活があるといったくらいだった。そして休日には相変わらず緑との逢瀬を繰り返した。この頃になると、ある程度性欲が満たせる状況が出来つつあったので、さすがに他への集中が薄れるという事はなくなっていた。勿論、精力が減退する筈もなく、休みに緑の身体を貪る事に向かって日々邁進していた。中間テストなども、前回の失敗は繰り返さず、何の問題もなく学年トップでクリアした。

強いて変化を挙げるとすれば、緑の様子が変わってきた事だ。中一にもかかわらず、周りに比して妙に魅力的に映るようになっていった。ガキの中に一人大人の女が混じっていると考えれば無理のない事なのだろうが。

彼女は性行為においても積極的になってきた。今までは恥じらいを見せていたのに、段々と自ら求めるようになってきたのだ。行為中、

「早く入れて…」

とか

「もっと強く…」

といったように私の身体を求める言葉を言ったり、自ら私の性器を口で愛撫したりするようになった。一度、陰部を顔に押しつけてまたがってきた時は、さすがに驚いた。

勿論、それに関して私に異存などある筈もなく、快く受け入れるだけだった。ただ、まだ中学一年の彼女をこんなにしてしまったのは自分だという罪悪感は、以前にも増して強くなったがね。

そんな状態のまま、時だけが過ぎていき、期末テストも終了した。私の順位も安泰で、文句なしに学年一位でこれを終えた。そして待ちに待った冬休みが到来、クリスマスや正月といった恒例行事が私

と緑を待ち受けていた。

クリスマスイヴの夜、私は緑を自宅に招いた。母は、二人の約束があるのを知ってか、それとも単に自分の楽しみの為か、クリスマスパーティに行くと言って家を開けていったのだ。この日は私がまた料理の腕を振るい、クリスマスらしく七面鳥の丸焼きに挑戦した。緑はその間にケーキを焼いてくれ、本格的クリスマスパーティの様相を呈していた。全て準備を終えた私達は互いに向かい合ってテーブルに着いた。

「乾杯！」

私は用意していたシャンパンの栓を抜き、二つのグラスに注ぐと、緑と杯を合わせた。パーティという事もあるうが、緑もさすがに以前のように飲酒に異を唱えはしなかった。

「美味しい！」

緑の言う通り、我ながら料理の出来は良く、次々と二人の胃袋に飲み込まれていく。

「ふーっ、お腹一杯……」

緑同様、私も破裂しそうなくらいの満腹を感じていた。しばらく小休止した後、私は「トイレ」と称して一度自分の部屋へ入った。彼女へのプレゼントを取って来る為だ。私は小箱に包まれた商品を持ち、テーブルに座る緑の元へ戻って来た。

「はい、これクリスマスプレゼント！」

私は手にした小箱を手渡した。

「えっ、何かしら？開けてもいい？」

受け取るやいなや彼女は包装を剥がして中身を確認した。

「わあーっ、凄い！いいの、こんなに高そうな物……」

驚くのも無理はない。プレゼントの中身はダイヤのネックレスだったのだ。

「それが俺の緑への気持ちさ」

「えっ……嬉しい……。大切にするわ」

高価な品を手に感激している様子の緑。だが、実の所、私は一銭

も使ってはいなかった。何故ならそのダイヤのネックレスは母の物だったからだ。派手好きで高価なアクセサリを身に付けたがる母だが、その分飽きも早い。ある日、このネックレスが放り出されているのを見て、緑へのプレゼントにしようと決めたのだった。私が盗ってからも、母はそれがなくなっただけで事など気付きもしないし、その存在すら忘れたかのようだった。こうして『高価な』クリスマスプレゼントの調達に成功したのだ。

「私の方はそんなに良いものじゃないけど…」

今度は緑が自分のカバンから包みを取り出し、こちらに手渡した。
「何だろう？」

ゆっくりと包みを解いて、中身を確認する。四角くないし、柔らかい事から衣類のように感じられた。予想通り、入っていたのは紺色のセーターだった。

「私が編んだの。上手くないけど、気持ちのこもった物をあげたかったから…」

「ありがとう、大事にするよ」

物の善し悪しはともかく、緑の気持ちだけは感じ入り、正直に嬉しく思った。天才と呼ばれ、年不相応に冷めていた私に人間らしい感情を少なからず与えてくれたのは緑である。そういう意味では、非常に感謝していた。しかし私は悪人だ。その気持ちを純粹にしておく事が出来ず、厭らしい肉欲的行為ばかりを追求していくのを望んでいた。

「緑、好きだ！」

今も緑の温かさに触れた途端、彼女を抱き締めていた。その上、口唇を重ねて吸う。そのまま私達はソファーにもたれて抱き合った。

私達は身体を重ね合う行為が終わった後も、素っ裸で寄り添い合っていた。緑は私のまだ発達しきっていない胸に顔を寄せていた。

「康介君って本当にエッチね。とても学校の天才児とは思えないわ」
私の胸の中で甘ったるい声で呟く緑。

「自分でも驚いているよ。緑の可愛らしい仕草なんかを見ると、どうにも我慢出来なくなるんだ」

いつになく、私は本心がスラスラと口をついて出た。

「ふうん。それってもしかしたら先祖代々、エッチな家系とかじゃないの？」

「先祖…」

その言葉を聞き、一瞬険しい表情になったのを緑は見逃さなかったらしい。

「ご、ごめんなさい。私ったら康介君のお家の事も考えずについて…」「いや、いいんだよ。全然気にしてないから」

彼女はおそらく『先祖』という言葉で、私が死んだ父の事を思い出したと感じたのだろう。だが、厳しい顔つきになった理由は違った。私は父ではなくて母を連想したのだ。あの娼婦、あの淫乱、あの売女こそが、私の病的性衝動の元凶に間違いなかった。その為、思い出しただけで嫌悪を覚えたのだ。

ただ、今の緑の言葉で脳裏に父親という存在がインプットされたのもまた事実だった。この後、私達は夜を徹して抱き合ったが、身体は緑を求めつつも、頭の中は忌々しい母と未だ見た事のない父が代わりばんこに浮かび上がっていた。

中学生編その7

大晦日の夜は母と家で年を越すことになった。珍しく母親らしく年越し蕎麦などをこしらえた女狐に、私は久々に口を利いた。

「ねえ、父さんってどんな人だったの？」

私にはクリスマスの夜以来、今まで全くと言っていい程知らなかった父親の存在が気掛かりとなっていた。

「どんな人って…？」

母はまるで聞かれたくない事を尋ねられたとでもいうような顔をして一度口をつぐんだ。

「例えば名前とか、顔とか、経歴とかさ」

私の質問を受けた母は少し考えるような素振りを見せながら、

「名前は、確か…高野哲^{たかのさとし}…」

と言った。この女、何たる言い草か。仮にも自分の夫だった男の名を忘れていたとは…。「確か…」などという言葉が出るだけでもおかしい。父の没後、余程多くの男性遍歴を重ねてでもいるのだろう。私は半ば呆れる思いだったが、このまま話を終えるのも嫌だったので聞く姿勢を保った。

「顔は康ちゃんを見てもわかるようにハンサムで、背も高くて180cm以上あったわ。大学は丁京大で、彼が学生の時に知り合ったの。康ちゃんの出来がいいのもきつと彼の遺伝よ」

母の口から初めて聞く父の様子に、私は何とも言えない気持ちになった。外見上の良い所ばかり彼に似て、中身はさっぱり受け継いでいないのではないか？そんな気がした。

「ふうん。写真か何か、一つも残ってないの？」

私は自分に似ていると言われ、父の姿を見てみたくなった。

「それは前にも言ったように、火事で一つ残らず焼けちゃったのよ。あの人もそれで一緒に…」

その言葉を発すると、母は下を向き押し黙ってしまった。いつも

脳天気に見えるこの女がこんな表情をするのは珍しい。立て続けに質問するのが何となく憚られ、しばらく間を置き、私は再び尋ねた。「ねえ、結婚はしていたの？」

その問いに首を振る母。そしてうつむいていた顔を上げ、

「駈け落ち同然だったのよ…。それでお互いの家から勘当されていたわ。だから今、親類縁者みたいな人は誰もいないの。せつかくお父さんの事を知りたかったでしょうに、ごめんなさい…」

と答えて、深々と頭を下げた。

「いや…」

私は母のめつたにない真摯な様子を見て、これ以上の追求が酷な気がしてこの話題を止めた。まだ少し引っ掛かる所はあったが、知らなかった事が少しわかっただけでも良しと思うことにした。

その後はＴＶを見ている内に母子二人で年を越す事となった。ＴＶから流れる年越しカウントダウンの連呼の間に、頭に想像上の父が次々と浮かんで消え、新年の幕開けと共に消え去って行った。気にしているだけバカらしいと思ったのだ。

翌日、私は緑と共に初詣に出掛けた。着物姿の緑はそれがまた似合っており、私の胸をときめかせた。赤と緑で彩られた丸い幾何学模様が、彼女の身体に吸い付くようなイメージを抱かせたのだ。

参拝客でこった返す神社に到着した私達は、境内へ向かう人の流れに沿って進み、賽銭箱の前に辿り着いた。二人共、財布から五円玉を取り出して箱の中に放りこみ、手を合わせる。緑は一心に何かをお願いしていたようだったが、その間私はその緑の事が気になつて仕様がなかった。手を合わせて目をつむれば、着物姿の緑を脱がせるイメージばかりが思い描かれた。そんな事をしている内に、背後から迫る人の群れの勢いに押され、私達はそそくさと境内を退散させられたのだった。

「ねえ、何をお願いしたの？」

「それは秘密さ。願い事っていうのは人に話すと効力がなくなるん

だよ」

当然、真実を言えない私はとってつけた理屈で緑の質問をはぐらかした。さすがに『天才』の肩書きは強く、彼女は納得したように頷いていた。

神社では、正月らしく巫女さんがお札や羽根飾りなどを販売していて賑やかさを演出していた。出店もたくさん出ていて、お好み焼き・トウモロコシ・焼きそばなどに行き帰りの参拝客が群がっている。そんな中、私は緑の手を引き、混雑する人の群れを脱出した。

「ねえ、これからウチに来ないか？ 母親もいないし」

私はずっと考えていた事を、単刀直入に切り出した。

「うん…」

緑は私の狙いを察知しているようで、ほのかに頬を赤く染めながら承諾した。OKが出たので二人で早々に家へ向かう。

誰もいない我が家の玄関ドアの鍵が開けられ、私達は中に入った。まるで泥棒の用心でもするかのように、内から再度ドアをロックする私。そして緑を伴い、自分の部屋へ入った。入るなり、

「緑、今年もよろしく」

「きやつ」

私は改めて新年の挨拶を交わすと同時に、緑に襲いかかった。相手の協力なしでは成立しない性行為は、まさに「よろしく」という言葉が相応しい。私は彼女を後ろから抱き抱え、自分のベッドへ運んだ。そして首筋に口唇を這わせつつ、着物の上からこの頃大きさを増し始めた乳房を揉む。

「はあん…はあっ…」

呼吸が段々と荒くなってくる緑。その身体は、私に翻弄されて前かがみに倒れこむような姿勢になる。すかさず私は着物の下半分をまくり上げた。

「は、恥ずかしい…」

眼前に、白い尻が現れ、少し下方に薄く毛が生え揃って中に赤みを帯びた部分が広がっていた。彼女は着物の下には何も付けていな

かったのだ。私はいわゆる『孔雀』と呼ばれる格好を緑にさせていた。着物の裾の広がり美しい鳥の羽のようになる事からこの名称が付いている。私は両手で尻を掴むと、力を入れて広げた。剥出しの肛門が、収縮している様子が見て取れた。

「いやーっ」

さすがに緑は恥じらいを感じ、拒絶した。だが私は手を緩めない。それどころか、新たに見えた穴に人差し指をゆつくりと突っ込んだ。ズブズブと音がしそうなくらい深く入り込む。

「いやああ、やめて…」

私の指に尻を貫かれ、声を揚げる緑。白い肉塊が揺れて目の前を踊る姿は、何故か私の心を満たした。淫蕩な血が流れている実感が、ふつふつと自分の中に起こるのを感じた。発車した電車が止まらないのと同様、暴走した気持ちも止める事は出来ない。私はブレーキなしで行為を進行し続けた。

緑は観念したのか、それとも異質の快感に目覚めたのか、嫌がる素振りをやめて身体をくねらせていた。私は余った左手で、孔雀の前方の穴に触れる。そこは既にたつぷりと愛液を滴らせ、獲物を待ち構える食虫植物のようだった。私は尻から指を抜き取ると、棍棒のようになつた分身を前穴に突き刺した。

「うっうっ…、ああ…」

快感に甘つたるい声を洩らす緑。上半身を着物で覆われたままの彼女との合体は、異常に興奮を誘った。その為、私はいつも以上に激しい動きで緑を攻め、数分後にはお互い放出感からグツタリとしてしまった。

私のベッドで着物を淫らに着広げている緑の姿は、幼くも妖しげで魅力的だった。まだ若く、回復力も早かった私は、元気を取り戻すすぐにまた飛び掛かり、そのまま彼女と何度も抱き合った。この日、私の中でまた何か邪なものが目覚めた。

冬休みが終わって、短い三学期が到来した。冬場は日暮れも早い

ので、部活も五時には終了する。おかげで必然的に緑と一緒に下校する機会が多くなっていった。正月の着物姿の緑との行為に妙な満足感を覚えていた私は、今度は制服姿の彼女に少なからず欲情していた。しばらくは家の前まで送り、キスをして別れるといった事で我慢していたが、一週間もするとその我慢にも限界がやってきた。制服姿の緑を征服したくてたまらなくなってきたのだ。

そしてついに時は来た。私はある晴れた日の帰り道、公園に寄ろうと提案して、人気のない茂みで緑に抱きついた。

「ちよつと康介君…、いきなりそんな…」

例の如く彼女は拒絶するが、私もいつものようにそれに耳を貸さず、黙々と相手の身体に触れる事に没頭する。

「ねえ、どうしたのよ？こんな所で…」

「俺は制服姿の緑を抱きたい…。この前、着物姿の緑を抱いた時、そういう気持ちで沸き上がってきたんだ！」

「そ、そんな」

半ば怯えたような表情で私を見る緑。私は自分の正直な気持ちを吐露しながらも、彼女の身体をいじくり回す行為は休まず、首筋に舌を這わせ、右手は制服の上から胸を、左手は太ももの辺りを触れていた。最近、淫乱化の傾向にある緑は、言葉とは裏腹に、身体の方は喜びを表現しているかのようであった。

「ねえ、私達が学校の帰りにこんなことをしてるってみんなが知ったら驚くわね…。こんな格好で一つになろうとしているのよ…」

緑が不意に発したこのセリフは、さらに私を狂暴化させた。中学生の我々が制服姿で身体を結合させようとしている事実の認識は、より一層の興奮状態へと導く事になった。緑も同じ事を意識している、それがわかって私は喜びを感じた。

「痛っ…」

その影響で私の掴む力も強くなり、手の動きも早くなる。彼女の胸ははだけて乳房が露出した。片方の手でそれに触れ、もう片方の手は制服のスカートに隠れた彼女の身体の中に入り込む。

「いやあああ…」

冬なのに、互いの身体は汗ばんでいた。全身が何らかの液体で濡れている彼女の身体は、熱を帯び、冬の寒さに白い水蒸気が立ち昇る。最小公倍数分の愛撫を済ませたと判断した私は、パンティーをはぎ取ってスカートをめくり白い尻をあらわにし、後ろから彼女と合体した。

「ああつ、ああ…」

前傾姿勢で木にもたれ掛かりながらあえぐ緑。学制服姿のまま、私達二人の身体が絡み合う。私同様、緑も異様な興奮を覚えているようで、二人の動きはいつも以上に激しくなっていた。そのせいで、私はあつという間に一度目を終えてしまった。

しかし一度では終わらない。猛獣のようになり、半分理性は飛んでいた為、無理矢理緑に口で回復させると、今度は正常位で覆いかぶさった。

「あんあんあん…」

制服姿で悶える緑が、さらに理性を吹き飛ばす。私は彼女の身体が壊れてしまうのではないかと思われるくらいの強い力で、抱き締め、上下した。これで緑は半失神状態となり、私はレイプ犯のように、乱れた制服姿の彼女の身体をさらに貪った。

理性が戻った（正確に言えば、行為中も理性は失っておらず、欲望に歯止めが効かなくなっただけなのだ）時には、緑が恍惚の表情を浮かべて横たわっていた。制服から素肌が露出しているのを見て、私は己れの変態性を意識すると共に、物凄い虚しさが込み上げてきた。

「緑、ごめんよ…」

開口一番、緑に謝るが、

「別に私は何も気にしていないわ…。それにしても今日の康介君、凄かった…」

と平然としている彼女を見て、さらに胸が重くなる。自分のせいで緑まで変になるうとしている、そう思えてきて心苦しかった。大

罪人にでもなったような気分になり、罪悪感が心に手錠をかけているような重苦しさがあった。強烈な脱力感が全身を支配する中、私は緑を家まで送り、帰宅した。

家に帰った私は、自分の存在に恥ずかしさを覚えていた。何が天才児だ、表面だけ良くて実はただの変態児じゃないか！これで勉強でも出来なかったらどうなるのだ？緑がいなかったら、性犯罪でも犯して少年鑑別所に行くのがオチではないか。それにその緑がおかしくなっているのも自分のせいだ。前は純情な子だったのに…。私が身体を求めたりしたから、彼女までが性に目覚めてしまったのだ。正月や今日の行為をヤバいと感じる事無くただ性行為に溺れる人間にしたのは私だ！

もう止めよう…。これ以上エスカレートしたら、どうなるかわからない。しばらく緑を抱く事を控えよう。この日、私は自分の中でそう誓った。

私は珍しく自ら禁欲を意識した。それから緑と一緒に帰宅しても別れのキスを交わすだけで、一切の性欲を抑制した。休日にデートしても、性行為に及ぶ事はなかった。確かに性欲は有り余る程あった。しかし今までの変質的行動を思い出すと、自制心が働き、我慢する事が可能だった。

ところがその意に反して、緑が私の身体を求めてくるという事態が発生した。

「ねえ康介君、今日は抱いてくれないの？」

などと聞いてくるのだ。それを受けて私は、

「俺達まだ中一なのになにちよっと大人の領域に入り込み過ぎたんじゃないかな。しばらくエッチな事はよそう…」

と答えるのだが、彼女は

「大人の雰囲気は味わおうと言ったのは康介君の方じゃない！それとも私の事を嫌いになったの？」

とまで言う始末。これには私も驚いた。まさかこんな事を苦慮す

る事になるとは思っても寄らなかった。仕方がないので、私は決ま
て、

「俺は緑の身体が心配なんだ。こんなに若い時からあんな行為をた
くさんしていたら、緑の身体が壊れてしまいかもしれない……。だか
ら少しの間、止めようと思ったんだ……」

と彼女の身体を気遣う発言をした。すると緑の方も渋々と納得す
るといった態であった。

制服姿で抱き合ってから、緑と一度も結合しないまま期末テスト
が始まった。心の中では判然としない思いは若干あったものの、以
前のように勉強に集中出来ないという事もなく、無事平穩に答案に
挑めた。そして一年生としての最後の考査も、いつものように学年
トップの成績を収める事が出来た。期末テストを『一年生としての
最後』とは言ったが、実はこの後、自分で予備校主催の『全国中学
生模試』という試験を受けていた。国語で一問とちった為、結果は
全国で二番だった。これがまた学校で評判となり、

「吉井は丁京大間違いなし！」

「この中学から天才児の輩出だ」

などと、まだ中学生の内から騒がれる事になった。しかし私の頭
には、丁京大と言えば死んだ父と同じ大学だという事以外、まるで
興味がなかった。それよりも性行為への恥辱だけがいつまでも尾を
引いていた。

中学生編その8

春休みになった。私は相変わらず緑を抱こうとはしなかった。互いに部活動のない日にはデートを重ねてはいたが、キス以上の行為に及ぶ事はなかった。ただ、デートしながら緑が不服げな気持ちでいるのは読み取れた。彼女にしてみれば、今や私と抱き合う事に至福を感じていたようで、それが全く行われない現状に大きな不満を持っている風だった。さらに性的興奮に目覚め始めている兆候もあり、肉体的にも欲求不満な様子がうかがえた。

しかし、私とて欲求不満がたまっていなかった訳ではない。性行為の事を忘れようと机に向かったりしていながらも、知らずの内に鉛筆を握っていた右手が性器に触れていたなどという事もあるくらいだった。段々と禁欲している事がバカらしくも感じられてきて、自制心が崩れそうになり、おかしくなりそうだった。

「何で我慢しているんだ？」

「早く緑とヤレよ！気持ちいいぜ」

そんな声が魂の奥底から聞こえてくるようで、私はちょっとした睡眠不足にまで追い込まれた。私の我慢の支えの源は『自分の変態じゃない』『母親とは違う』という信念だった。それを意識する事で、何とか迫り来る性欲を押さえ付けていた。

そして私は中学二年になった。今年も緑とは別のクラスに別れてしまった。その掲示板を見て、内心ホッとした。今、彼女と接する時間が増えれば、それだけ多くの忍耐が要される。正直、助かったと思った。

二年生になってまた学校と部活の日々が繰り返された。部活では春の大会が六月にある為、それが終わるまでは土日毎週練習があり、おちおちデートもしていられなかった。私達の交流は、部活の終了時刻が同じような時に一緒に帰宅したり、電話で話したりとい

った程度に押さえられていた。

六月になり、春の中学生体育大会が行われた。各運動部とも定められた会場に赴き、他校としのぎを削る。二年生ながらも部で一番の実力者となっていた私は、大会でも次々と勝ち抜き、県で三位というまずまずの成績を残した。

大会が終了すると、部活の練習も緩くなつて、日曜日は休みになった。休みとなった最初の日曜日、私は久々に緑とデートした。この日は私が県で三位になった事から、緑にテニスを手ほどきする運びとなった。誰も来ていない学校のコートで、二人きりでテニスを楽しむ私達。ボールがコート上を飛び交う。

「わあーっ、康介君本当にうまいのね」

緑は私を褒めちぎる。この日の彼女は上半身白いポロシャツにスコートを履き、いかにもテニス少女といった格好だった。勿論その姿は彼女にマッチしており、とても可愛らしく映った。

コート上で一時間もラリーを続けていると、上空に黒雲が集まってきた。小雨がパラついてきた。

「ちよつと降ってきたな。退散しようか？」

「うん」

私達は慌てて用具を片付け、コート整備を始めた。二人でネットを畳んでいる間に雨の勢いは増し、直撃を受けた私達は共にずぶ濡れになってしまった。

「いやー、まいったまいった」

私が突然の雨に「やられたな」という表情をして緑の方を向くと、濡れた事で彼女のウエアから肌が透けて見えていた。特に胸は先端が見える程だった。これには我慢中の私も少々ムラツときた。しかしそれには一切気付かない振りをして、誰もいない体育館脇の更衣室まで彼女の手を引く。

ここで異変が起こった。男女別れた更衣室の入り口前で手を離そうとした私を、緑が女子更衣室の方まで引つ張り込んだのだ。

「み、緑、何するんだよ？」

質問に答える事無く、彼女はいきなり抱きついてきた。そして事もあろうに私の股間に触れてきた。

「お、おい、どうしたんだよ」

先程からの下着の透けなどで、多少の興奮を覚えていた事もあり、私の性器は膨張していた。緑は終始無言で私のテニスウェアの下を引きずり降りし、雨に冷えた両手で私自身を握った。熱くなった肉の塊が急速に冷やされて、その心地よさからまた血が巡って太さを増す。さらに彼女はその肉塊に口唇を合わせてきた。

「み、緑…」

私は彼女のあまりに大胆な行動に呆然としてなすがままになっていた。気に懸ける様子もなく、食事のようにしゃぶりつく緑。

「うっ…」

私は思わず声を洩らした。彼女の舌がねつとりとした触感で先端を刺激してくる。気持ち良さに、今までの忍耐は崩壊寸前だった。快感の享受される身体に揺らぐ心。

「うあっ…」

彼女の舌使いによる攻撃に耐えられなくなった私は、物凄い勢いで噴出してしまった。緑の顔面に私の体液が出の悪いシャワーのように降り注いだ。が、何と緑は無言で放出された精子を飲み込んでいた。そしてしなびれた枯れ枝のような私の性器を再度愛撫してき

た。

「み、緑…」

「んぐんぐ」

と肉棒を含む音だけが彼女の口から発せられていた。若い私はこの口撃で早くも元気を取り戻していた。この状況下で、既に私の我慢も限界に達していた。こうやって緑と性のやり取りをしてみても、改めて禁欲に何の意味もなかった事を感じた。「やりたい事をして何が悪いのだ!」「他人にバレなきゃ変態じゃない」といった、ある種邪悪な意識に支配され、ついに私は緑の身体に手を触れた。欲望を解き放った私は、ポロシャツから透けて見える彼女の胸を掴ん

で握った。

「あつ…、康介君…」

「緑、悪いけどもう我慢出来ない」

「いいわ…、それを待っていたのよ」

緑はずっと待ち焦がれていたという状態で、激しく身体を揺り動かした。濃厚なキスを交わしながらポロシヤツを脱がせる。やはりその下には何も付けてなく、ツンと立った乳首が顔を出した。私は緑を床に押し倒すと、その尖った実にしゃぶりついた。

「ああん、ずっと、ずっと待ってた…」

舐めて噛んで胸を刺激しつつ、私の右手は下半身へと動いていた。スコートをひつpegがすと、雨なのか体液なのかわからぬ程濡れているパンティに遭遇した。それを履かせたまま、指を突っ込む。下着が伸びていき、指と共に彼女の洞窟に吸い込まれる。

「うつつ…、あああ…、気持ちいいっ！」

久々に緑の喘ぎ声を耳にして、一層興奮した。汚らしく厭らしい音を立てる彼女の部分に、早く入りたくなってきた。深々と入っていた指を抜き取り、一気に下着も取り去ると、私の入るべき入り口が姿を現わす。私はまるで久しぶりに故郷に帰ってきたかのような気分で、彼女の中に入り込んだ。

「あつあつあああ…」

私は侵入した途端、激しく腰を動かした。身体の下緑は快感に身を任せている。気も狂わんばかりに互いの身体に触れ、舐めまくる。欲望だけに頭を埋め尽くされた私は、ただひたすら彼女の身体を攻め続け、何時の間にか果てていた。

これで終わる筈がない。もう正常も変態もどうでもよくなった私は、新たな方法での性交を目論んでいた。

「うつつ…」

私はまだ忘我の状態にある緑に、一度脱がせたテニスウェアを着せた。雨と体液でぐちょぐちょになったウェア姿の彼女は何とも淫らなものだった。早くも回復の兆しを見せていた私は、強引にスコ

トの中の彼女の両足を開いた。

「あつ……」

どう見ても綺麗とは思えない彼女の深奥への入り口、しかし何故そこへの執着があるのだろうか？何かに導かれるように私はそこへ顔を寄せる。更衣室のムレた匂いと緑自身の匂いが混じり合って、それがいい匂いとはお世辞にも言えないのだが、不思議と興奮を呼び起こす。淫靡な性の香りに惑わされた私は、舌を延ばして神秘の世界を探った。己れの異常なまでの執着心から、奥の方に真理を知る何者かが潜んでいるかのような気さえしてくる。

もはや学校ではめったに新知識を得る事のない私にとって、緑の身体の奥底こそが唯一勉強出来る場であつたのだ。ようやくそれに気付いた私は何のためらいもなく変態的行為に浸っていく。テニスウェア姿での結合は、二人に予想以上の興奮をもたらして、数分後私達はグツタリとして床に横たわっていた。

欲望の魔力から覚め、多少なりとも正気を取り戻した時、現在いる場所が中学の女子更衣室だと思い出し苦笑した。これはまた異なる所でもんでもないことをしでかしたものだ。改めて自分の変質性を感じた。が、もはやそれは大して気に掛かる事でもなくなった。

『天才児』だろうと、勉強より興味のある事は存在する。いやむしろ天才だからこそ、勉強に退屈し、他の楽しみを追求するのだろう。それに私は天才と呼ばれたくて生きているのではない。己れのやりたい事は、勉強よりも性行為の方にベクトルが向いていた。大体、正体が露見しない限りは変態ではなく、天才でいられた。強いて言えば、母と同様の生き物と見られる（もしくは自分でそう感じる）事だけが嫌だった。

緑の身体の心配や己れの変質性の事は既に頭から消えていた。この日、彼女から仕掛けてきた時点で私の頭には『同類』と認識されたのだ。確かにその種を作り上げたのは私だったが……。

私は以前にも増して性獣と化していた。緑とデートすれば、必ず

性交に及んだ。そして正月以来開始された変態的なプレイもその色合いを濃くしていた。洋服を着たままや、緑に水着を着せてなど、様々な状況下での行為を楽しんだ。新たな方法をクリエイトする事で創造力や知識欲も掻き立てられ、大いなる満足を得る事が出来た。そして中学二年は性と部活に明け暮れて過ぎていった。学問の方は勿論、No1の座を明け渡すことはなかった。知能テストにおいて、IQが180以上あることが証明された私にとって中学程度の学習は、半ば適当にやっつけていてもどうにかなる代物だった。

中学生編その9

私はついに中学三年に進級した。おそらく学問の上でも性行為の上でも、当時日本で最も中学生らしくない生徒であっただろう。学年的には高校への進学を考えねばならぬ時期が来た訳だが、まわりがそわそわし始める中、私は至って平然と構えていた。

部活においてはキャプテンとなっていた。試合成績は勿論、先輩には「しっかりしている」という印象があつたようで統率力などを買われ、任命されたのだ。

毎年のようにこの年も新入生が『テニスⅡ楽』というイメージを抱いてたくさん入部してきた。入部者が多かったのは隣のコートを使用している女子部も同様だった。私は人数減らしの為に一年生に厳しい基礎トレーニングを課す傍ら、視線の方は大量の女子新入部員の姿を追っていた。彼女達は初々しくてかわいらしかった（勿論中には私の基準を外れる子もたくさんいたが）。彼女等の目を意識してか、自分がプレーする時には自然といい所を見せようという感じの動きをした。そのせいか、練習終了の頃には男女部員が総出で蟻のように集まってきて、私のプレーに見入っていた。

「すっごーい！」

「うまいわあ！」

「カッコいい……」

などと黄色い声が揚がるのを、悪い気がする筈もない。おかげで私も調子に乗って魅せるプレーを心掛けた。おかげで帰り際、仲間に随分と不評を買ったが……。

初日を境に新入部員は、男女共にその数を減らしていった。一カ月後には、男子は九名女子は十四名となっていた。その残った女子部員の中に、一人だけ私の方から気になった子がいた。それが篠原優子だった。

篠原はショートカットで丸い目をくりくりさせ、小柄で活発な少

女だった。テニスの方もその運動神経の良さからか、二、三年生と互角に打ち合い、一年生でレギュラーをモノにしていた。そんな彼女は入部以後、私に寄ってくるようになっていた。

「吉井先輩ってどうしてそんなにテニスが上手なんですか？」

とか、

「吉井先輩って学校一の天才だったんですね。丁京大とか行くんでしょう？ 凄いわあ」

などと言って、会う度ごとに私に話し掛けてきた。私も彼女の事を可愛いと思っていたし、性格や雰囲気も嫌いではなかったのにこやかに会話に応じていた。

そんな状態が続いたので、三年生になってからの部活は今まで以上に楽しいものとなった。緑は私が下級生と親しくしているという事を聞き付け、疑いの眼差しを向けてきたが実際何もしていなかったので、私は潔白を主張し続けた。そんな時、決まって彼女は、

「康介君が好きなのは私だけだよね？」

などと尋ねてくるので、私も調子を合わせて

「当たり前だろう。緑以外の女の子を好きになる筈がないじゃないか」

といった風に受け答えしていた。とは言いながらも、多少篠原の事も気に掛かり出してはいた。実際、家では「彼女を脱がせたらどんな体型だろう」とか、「可愛い声を揚げるんだろうな」とか、邪な妄想を抱いたりはしていたのだ。勿論、行動に移る気はさらさらなかったが。

六月になり春の大会が行われ、私は県で三位と惜しくも全国大会への出場権は逃してしまった。そんな私の全ての試合に篠原は応援に来た。彼女自身は三回戦で負けてしまったようで、女子の先輩の応援もそこに私を応援しに来ていた。私が負けた時には、私自身は平然としたものだったのに、彼女の方が泣いていた。

「おい！ 篠原さん、明らかに康介に気があるな」

帰り際、ダブルスのパートナー松井にそう言われ、前々から自身でも感じていただけに、表向きは否定したが、内心は妙に納得させられてしまった。

「しっかしいよな、康介は。勉強も出来るし、吉永さんっていう可愛い彼女がいるし。さらに一年生にも惚れられちゃってさ。俺だって一緒にダブルス組んで、ちよつとは活躍してんのにさ……」

松井はへの字口でボヤク。それを聞き、私は何も言わずに苦笑いした。

松井の言う通り、私は恵まれているのか？確かに成績も性績も良好だが、自分が満足しているかどうかは甚だ疑問であった。他人からは順風満帆に見えても、本人が充足していなければ本当に『いい』とは言えないのではないか？今までの人生をよく考えてみると、確かに欲望を満たすべき行為は成し遂げているが、真の満足を得た事など一度もなかったと思う。じゃあどうすれば真の満足を得る事が出来るのだろうか？帰宅中、松井のボヤきを上の空で聞きながら、私はずっとそんな事を考えていた。

帰宅して床に就いても、まだ私は己れの満足について考えていた。中学生ながらなまじ頭が回るだけに、こんな事を考えてしまうのだろうか？久々に真面目な事柄で頭を悩ませている気がした。停滞する私の頭をよそに、時計だけが進んでいき、段々と答えの出ない思考を続ける事が馬鹿らしくなってきた。

「やめた！」

私は部屋で一人、降参を宣言すると布団を被って眠りに就こうとした。すると途端に違うものが頭に浮かんできた。篠原だった。この日の彼女の格好、試合用に、白のポロシャツにスコート姿だったが、小柄のくせに中一とは思えぬ身体付きをしていた。意外にも胸は大きく、白く細く伸びた脚も綺麗で、つい私が入ってしまう程だった。結局この夜、私は空想の世界で彼女を抱いた。

翌日、いつもと変わらぬ調子で接してきた篠原を、私は一層可愛く感じていた。とはいえ、縁同様、愛という感情ではなかったが。

「先輩、昨日は感動しました」

瞳を潤ませながら前日の事を話す篠原。そんな顔を見ていると欲望がむらむらと沸き起こってきて、周りに誰もいなければ抱き締めてしまいそうだった。この日から私の頭の中に彼女が住み着いた。出来るものなら緑にばれずに篠原をモノにしたい、そんな感情が芽生え出していた。

中学生編その10

夏休みが来た。部活と緑とのデートを繰り返す傍ら、毎年恒例テニス部合宿がこの年もN県の山の方で行われた。普段めつたに顔を出さない顧問がこんな時ばかりしゃしゃり出て来て、厳しい練習メニューを課す。三日間の練習漬けで、皆暑さと疲れでへとへとになっていた。

最終日の夜は交歓会ということで、男女のテニス部員が集まって飲食を共にした。図らずも私の隣には篠原が来た。この日のTシャツに短パンの姿もスポーティで、彼女に似合っていた。

「先輩、合宿お疲れ様でした」

篠原は目上への気遣いが出るのか、こんなセリフがすぐに出てくる。

「ああ。篠原もご苦労さん。疲れただろう？」

「ええ。さすがに中学の部活は厳しいですね。私、体力には自信があったのに……」

「そりゃそうだ。俺だって三年間やっているけど、今年も全身が筋肉痛だよ」

「えっ、先輩もなんですかあ？私、先輩は軽々と練習をこなしているように見えたんで、そんなことはないと思ってました」

「そんな訳ないだろう。俺だって疲れる時は疲れるよ」

「あはっ、そうですよね」

何故か笑ってみせる篠原。

「何だ、何かおかしいのかい？」

「いえ、先輩も私と同じ人間なんだなああってわかって嬉しかったんです。だって先輩は勉強もテニスも出来て凄いから……」

「バカだなあ、俺だってスーパーマンじゃないんだぜ。普通の人間だよ」

私は篠原の言葉を聞いて、いつも自分が周りにこんな風に思われ

ているのかと感じた。そんなに人間離れしているように映っているのだろうか？私は普通の人間と何か違うのだろうか？

「…ばい…、先輩」

「ん！」

気が付くと篠原が私をずっと呼んでいた。どうやら自分の考えに没頭してしまったようだ。

「どうしたんですかあ、先輩？ボーツとしちゃって」

「いや、何でもないよ。疲れてるのかな？」

私は篠原の問いを適当な理由でごまかした。それから私は篠原と交歓会の間、喋り続けた。彼女は幾分私に寄り添うような感じで話し、その頬は真っ赤になっているように見えた。

しばらくして、私はトイレの為席を立った。合宿所の汚い便所に入り、小便をした。そして手を洗い、入り口の戸を開けた時、

「先輩…」

何と篠原が思い詰めたような顔をして立っていた。

「篠原、どうしたんだ？ここは男子トイレだぞ」

「は、はい…」

私は幾分ムードを壊すような事を口走った事を内心後悔したが、別に緊張するでもなく、彼女が何を言いだすのか、じっとその顔を見つめた。

「あ、あの、先輩…」

「ん？」

「お話したい事があるんですが…。外に出ませんか？」

「ああ、いいよ」

私は返事をして、彼女の行くままに付いていき、合宿所から外へ出た。暗闇の中、私達は少し歩いて近くの川べりまで来た。まだ秋でもないのに、鈴虫まがいの鳴き声が聞こえていた。

「話って何だい？」

大体事情が飲み込めた私は、冷静な態度を装い切り出した。すると篠原はこちらを向き、じっと私の顔を見つめて、

「先輩…、私、吉井先輩が好きです」

と何の前置きもなしに告白してきた。ある程度予想はしていたが、それを聞いて自慰を思い出したりして多少動揺はした。一瞬の沈黙が私達を包む。川の流れる音と虫の音だけが微かに響いていた。何秒間、黙っていただろう、何も言わない私にしびれを切らしたのか、篠原が口を開いた。

「でもダメですよ。先輩には吉永先輩っていう綺麗な彼女がいるし…」

私がずっと口をつぐんでいるので、彼女は独り合点をして結論を出し、背を向けようとした。

「待てよ篠原」

言つなり私は背後から篠原を抱き締めた。

「せ、先輩…」

篠原の動揺が触れている肌から読み取れる。彼女は震えていた。私は何も言わず、彼女の身体を己れの正面に向かせるとその可憐な口唇にキスをした。

「う、嬉しい…」

篠原は私の行動を答えたと思ったようで、喜びの表情を見せる。チャンスとばかりに、すかさず私はもう一度口唇を合わせる。今度は彼女の口に舌を入れた。明らかに「驚いた」という表情を見せる篠原。が、ぎこちなくも私に合わせてきた。舌と舌が互いの口の中で唾液と一緒に絡み合う。

「素敵…。私達キスしているんですね？」

感動している様子の篠原は、目からうつすらと涙まで滲ませていた。だが、この時の私の腹積りは決して彼女が思っていたものと同じではなかった。緑を捨てて篠原に鞍替えしようなどとは当然思っていないかった。私はただ欲望のままに動いていたのだ。ここで篠原の申し出を断らなければ、家での妄想が現実にもなり得ると判断した上での行動だった。

「なあ篠原、思い出を作ろう」

「思い出？」

「俺もお前が部活に入ってきた時から気になっていたんだ。まさか告白されるとは思っていなかったよ。こんなに嬉しい事はない……」

「本当ですか？嬉しい……」

「こんな合宿中の夜に気持ちを打ち明けられるなんてロマンチックじゃないか。だからと言っては何だが、俺も最後の合宿だし、篠原とここで思い出を作りた……」

私は緑が聞いていたらただでは済まないような事を口走っていた。しかも全く心にもない事を。本心はただ篠原を抱いてみたいだけだった。そして彼女の様子を見ている限り、私の押し方次第で十分に可能性があるように思えた。

「先輩、思い出ってあの……」

篠原は私が『思い出』という言葉で何を望んでいるのか、察知はしているようだった。それで考え込んで多少ドギマギとしている風だった。私はまた何も言わずじっと彼女の顔を見つめる。再び沈黙が私達を取り巻いた。どういう返事が出るのか期待に胸膨らませて、回答を待つ。これに比べたらテストの結果を待つ事など、屁でもない。それだけ大事な結果待ちだった。

「でも、私初めてなんです……」

やっと口を開いた篠原から出た言葉はこれだった。

「そんな、俺だってそうさ。だから思い出なんだよ」

「お互い初めての……なんですね？」

「ああ」

「私、嬉しい……」

処女の夢を砕くまいと、私は嘘も方便とばかりに次々と虚言を吐いた。そして彼女を再度抱き寄せた。

「いいんだね？」

私が最終確認のつもりで問い掛けると、篠原は恥ずかしそうに頷いた。覚悟を決めたと判断した私は、彼女の手を引いて草むらまで連れて行った。

「えっ…こんな所で…するんですか？」

私は黙って首を縦に振ると、いきなり彼女を押し倒した。もう欲望をため込んだ防波堤の堰は切れていた。

「ああ、先輩好きですっ…」

私は自分の身体を上にとすると、先程以上に激しいキスを交わす。同時に今まで誰にも触れられていなかったであろう胸に触る。Ｔシャツの上からでもそれが結構な膨らみを備えているのがわかった。小柄な身体の割合に比例していない大きさと、数学的にも矛盾している。その未知の存在に早く出会いたくなってきた、私は慌ててＴシャツを脱がせた。万歳のような格好をした彼女の胸に、ブラジャーが姿を現わす。

「あっ」

恥ずかしさで思わず声を揚げる篠原。私はその口をもう一度己れの口で塞いだ。そのまま首筋に移動して吸い付きながら、ブラを剥ぎ取る。

「きゃっ…」

暗闇でも彼女の乳房は白く輝き、その色形がはっきりとわかった。真っ白く形の整ったお碗型の膨らみに、ピンク色をした実がなっている。中一なのに緑より大きかった。私は宝物でも発見した海賊のように、勇んで飛び掛かった。舌で舐め回すと、彼女の身体が面白いように反応した。実は固くなってきた、私の舌で転がされている私の愛撫で反応する篠原の身体は、どんな科学実験よりも興味深いものだった。性行為をする度に、勉強の馬鹿らしさがしみじみと感じられる。

「ああ…」

知らずの内に彼女が洩らす声が脳を刺激し、今の己れを司る部分が耐え切れなくなってきた期待と共に膨らむ。我慢出来なくなってきた事を悟った私は、短パンの上から彼女の股に触れる。

「いやあん…」

篠原の顔が今までで一番赤く染まった。構わず私は指を厭らしく

這わせる。ついに篠原は羞恥の極みか、手で顔を覆った。だが肝心の箇所は私の手の内にある。短パンの上からではつまらなくなってきた私は、それを取り去って、彼女の身を包む物を白い布一枚にした。

「篠原、かわいいよ」

満天の星空の下、ショーツ一枚で草原に横たわる篠原の姿は、私に嘔吐かせなかった。たるみもなく均整の取れた純白の肉体が、私の身体の下にあった。私は下着の上から丹念に指で舌で彼女を愛撫した。陰臭が鼻を刺激してきて、更に欲望が燃え上がる。彼女の全身は汗と私の唾液にまみれ、ショーツも精液でびっしょりになっていた。十分に準備が出来上がったと判断した私は、彼女を守る最後の鎧を取り上げる。

「は、恥ずかしい…」

どうしていいかわからないという表情で私を見る篠原。私は軽く微笑して、彼女の安心増幅に努め、

「いくよ」

と合図する。軽く頷く彼女に、巨大な剣が突き刺さる。

「うあっ…」

剣先の太さと鋭さの為か、思わずうめきを揚げる篠原。しかし体育会系らしく、痛みに耐えている。その健気な様子に更に征服欲を刺激された私は、奥までゆっくりと侵入を開始した。

「ああああああ…」

痛みを感じながらも、私が性感帯をいじくり回す度に彼女は声を洩らす。

「わ、私達の身体が、繋がっているっ…、うっ、うああ…」

篠原は行為自体に感激しているようだった。しかし、目からは涙がこぼれ落ちており、初体験の痛みをうかがわせた。私も鬼ではない。少しでも痛みを感じさせないように、下半身を動かすのを止め、首筋から胸に掛けて優しく触れて吸った。

「いやん先輩…」

愛撫を繰り返す内に、段々と篠原の表情が苦痛から陶醉へと変化してきたのがわかった。痛みが快感に変わったのか？

「もう痛くないの？」

私が尋ねると、彼女は黙って首を縦に振った。激しい運動で処女膜が破れたりする事もあると聞く。私は女ではないからよくはわからないが、出血も微量なことから、もしかするとあらかじめ亀裂でも入っていたのではあるまいか？確かに緑の時と比べると、篠原の痛みがりは大した事がなかった。いずれにせよ、待っていたとばかりに私は腰を使ってゆっくりと動き始めた。私の身体の一部が篠原の身体に出入りを繰り返す。

「くっ、はあっ……」

彼女は私が動く度に声を出す。篠原の中はまるで私を「離さない」とでも言いたげな程、締め付けがキツかった。私もそれで下半身が痺れるような感覚を覚えて、一層の快感を貪りにかかった。血と精液の混じり合った結合部がグチュグチュと厭な音を立てる。その音を聞くだけで妙な興奮が増幅してきて、私に更に強く篠原を攻め立てさせる。

「あんあんあん……」

半ば身体を痙攣させながら大きな声を揚げる篠原。静かな真夜中の野外に、彼女のおえぎ声が響き渡る。川の流れと共に聞こえていた虫の音さえ、彼女の甘い声の大きさにかき消されてしまっていた。私は篠原の身体の強烈な締め付けに、限界寸前となっていた。己れの身体の下で恥じらいながらも悶えている篠原を見ていると、普段抱いている緑とはまた違った初々しさを感じ、精神と肉体が昂揚してくるのだった。暗闇の中で、まだ幼さを感じさせる女体が怪しげに踊る。出来る事なら私も共に踊り続けたいのだが、クライマックスを迎えようとしていた。

「うっ」

私は慌てて篠原の身体から脱け出すと、耐え切れなくなって射精した。

「きゃっ」

発射された白濁の液体は、非道にも篠原の顔から胸にかけて命中していた。ねっとりめめりのある精子を顔にくらい、うわ言のように呟く彼女は妙にエロチックで、私の性欲を早くも回復させる。元気を取り戻した私は再び全裸の篠原に襲いかかった。

「いゃん…」

この子は何と言っても恥じらう姿が可愛らしかった。緑には整った顔立ちの女特有の気品のようなものを感じるが、篠原は年下という事もあってか、可愛さが際立って感じられた。私はその愛くるしい身体を自分の元へ引き寄せると、まだ血と愛液で泡立っている尊い部分に口を寄せた。そしてわざと厭らしく音を立ててしゃぶりついた。

「ああ、せ、先輩…、そんな所汚い…、あっ！」

ストローで少なくなつた飲み物をするような音が響いていた。

私は「行儀が悪い」と注意されてもついそうやってしまふタチだった。それと同じかどうかは知らないが、今やっている行為は止めると言われても止められないものだ。血も出ており、自分としては汚い事は承知している。正直、未だに性器を舐めるという行為の不浄さは不思議でならない。しかしそれでも一端始まると止まらなくなるのが性行為というもの…。一つ思うのは、篠原という私から見ても愛らしい存在、その内奥に潜むグロテスクな部分、このギャップが人を狂わせて性行為に駆り立てるのではないだろうか？今はそんな風にしか考えられなかった。この命題が解けた時に、初めて人は性行為に飽きるのではないだろうか？

「ああん…、何で、こんなことが気持ちいいの…」

その言葉から篠原も同じような疑問を抱いている事がわかる。当然、感じるのに精一杯で、私ほど真剣には考えてはいないだろうが…。

とりあえず飽きることなく舌を使って篠原を刺激すると、その身体は激しくくねった。そしてじわーっと愛液を滴らせる。そうして

いる内にまた欲望が自分の中に満ち満ちてきて、もう一段上の行為がしたくなってきた。天才の探求心、向上心は果てしが無いのだ。

「あつ、先輩、何を…」

驚く篠原の声も無視して、私は性器を舐めながら自分の下半身を彼女の顔の辺りに持つていった。そして己れの性器を彼女の口に当てがって、相手の身体を上にした。

「んぐ…」

ほとんど強引に篠原の口に自分のモノをねじ込んだ私は、やり過ぎかとも思ったが、次の瞬間その心配も杞憂に過ぎないのを悟った。何と篠原は、自ら愛撫を始めたのだ。

「し、篠原…」

「せ…んぱいつ、んぐっ…、こ、これでいいんですか？」

「あ、ああ…」

「よ、良かった。私も、んっ…、自分だけ気持ち良くなるって、んっ…嫌だったから…先輩にも気持ち良くなって欲しい…、ああ…」

篠原は私のペニスを口に含みながら気持ち悪く吐露した。真剣な物言いの割にはふざけたシチュエーションであり、私は思わず苦笑してしまった。だが、篠原にとっては本当に真面目な事柄のようで、慣れないながらも一生懸命に舌を使つてバナナのように舐めてくれた。これにはさすがの私もふざけ半分の自分を少しは内省し、誠心誠意女体の愛撫に努めた。

「あつ、んぐっ…、あああん…」

今まで以上に大きな声を張り上げる篠原。身体もビクビクツと震えが大きくなり、くねると共に背中が弓なりに反り返っていた。次第にあえぎ声も絶叫に近くなってきた。

「あああ、せんぱいつ…、私何かヘンになりそう…」

篠原はどうやら絶頂を迎えたようだった。彼女の身体は軽く痙攣し、表情はとろーんとして目を泳がせていた。口からはよだれを垂らし、乳房は波打っている。私はまだ元気な自分の武器を彼女の口から離し、ここぞとばかりに彼女の胸に押しつけた。そして両方の

小山で挟み込み、忘我状態の彼女の意志など関係なしに、刺激を加えた。いわゆるパイズリというやつだ。篠原の胸は豊満で弾力もあり、最高の心地よさを引き出す。こんな事をしてもいいのだから、と自問自答する間もなく、私は猛烈な勢いで篠原の胸と顔目掛けて噴出した。

「ああ…うつつ…」

朦朧とする篠原にどろどろとした粘液が絡み付く。傍から見る者があれば、何と非道な行いと思った事だろう。その篠原の顔は、当事者の私にも少し憐れに映った。だが、情など過去に捨て去った私はさして気にも留めず、もう一度裸体の彼女を抱き寄せた。

「ごめんな…」

私は一応、表面上は謝った。

「いえ…。全然気にしてませんから…。それよりも嬉しかった…、先輩とこんな…」

篠原の言葉に嘘はなく、その顔も初体験の感動にうち震えているといった風だった。それを見て私も調子に乗ってきて、彼女にキスをする、もう一度性交に向けて愛撫を始めた。

「あっ…」

行為の果てにグツタリとして横たわってから何分くらい休んだだろうか。身体の重さが多少抜けてきた私達は川に入り、共に身体を洗い流した。熱帯夜だったので、水の冷たさが何とも気持ち良かった。身体が乾くと、互いに始めに着ていたＴシャツと短パンを身に着け、合宿所へ戻る事にした。

「なあ篠原…」

「はい」

「今日の事は…」

「わかってます。内緒にします」

篠原は、私が理不尽にも頼もうとしていた事を察知していた。なおかつ、それを承知してくれた。収束について考えを巡らしていた

私は、うまく収まりそうな予感にほくそ笑んだ。

「先輩、私、今日の事絶対に忘れません」

「ああ、それは俺もだ」

私はまたいつものように心にもないセリフを吐いた。ただ、「忘れない」というのはあながち嘘とも言えなかった。それ程この日の篠原との体験はインパクトがあつた。

「先輩、私、先輩が付き合ってくれなくても好きですから…」

少し寂しげな顔をして話す篠原を見ると、何だかいとおしさのようなものも芽生えてくる。私は彼女をギュッと抱き締め、軽くキスをした。

「嬉しい…」

「篠原、確かに今付き合う事は出来ない。でも俺もお前が好きだし、あんな事をしたのはお前だけだから…」

「わ、私、その気持ちだけで十分嬉しいです…」

篠原の答えを聞き、私は内心ニヤリとした。その場の勢いに駆られて多少やり過ぎてしまい、下手すればどうなるかと思っていたが、予想以上に篠原は私にゾッコンで、何とか上手く言い包めることが出来た。私はこれならば緑にバレることはないだろうと安心した。

中学生編その11

波乱の合宿は終わった。部活の練習の舞台はまた学校に戻った。わずか三日間なのに、緑とも久々に会ったような気がした。緑からは「何か変わった事あった？」という質問以外、篠原との仲を疑うような言葉は特に出なかった。私は平然として嘘を吐き、緑を前にしても何のやましい気持ちも感じなかった。何と卑劣な奴だろう、と我ながら思ったが、だからといって直す気もないのでどうしようもない。

私達はいつものようにデートした後、身体を重ね合わせていた。ここで一つ新しい発見があった。篠原を抱いてから改めて緑を抱いてみると、また今までにない新鮮さがあったのだ。いつも抱いていた緑だが、篠原との比較が出来る為、性感帯・感度・部位の形など、新たな気分で楽しめるのだった。互いの身体や精神にそれぞれの長所短所があり、性行為における享楽の幅が広がるような気がした。

何よりそれは篠原のおかげであった。私は合宿での行為を『思いつく』とか言っておきながら、学校へ戻って来ても緑と部活が違いのをいい事に、練習後にこっそりと篠原と会っていたのだ。それも最初はキスしたりする程度だったのだが、我慢を嫌う私の本能の影響か、次第に胸を触り、股に触れるという風にエスカレートしていった。当然篠原が拒む筈もなく、正規の練習後に二人だけの秘密練習が行われる事もしばしばだった。始めて一週間も経つと、私達は裸で抱き合うようになっていた。行為の場所は大概女子更衣室。テニス部より遅い時間まで熱心に練習する部は他になかったのだ。勿論、キャプテンである私が意図的に練習時間を操作していたせいでもあるが…。

いずれにせよ、夏の暑い日差しの中での練習後、私達は汗にまみれた互いの身体を寄せ合い抱き合っていた。汗臭い匂いと、男女それぞれの香りが入り混じって二人の鼻腔は刺激され、獣のように激

しく身体を求め合った。そして練習の成果か、篠原は段々と慣れてきてこちらの注文に応えるようになって共に、徐々に積極的にもなり、自ら私を求めるようになってきた。

私はついに二人目の犠牲者を出してしまった。しかしもはや罪悪感は微塵もなく、篠原とは半ばセックスフレンド的なスタンスで接していく事となった。本人も「いつかお前と……」という約束をぶら下げておくだけで、容易に私の言いなりになっていた。そんな訳で精を使い果し、いつも帰る頃には二人共くたくたになっている有様だった。こうして中学生生活最後の夏休みも性行為に浸り切って過ぎて行った。

楽しい夏休みが終わると、私達三年生にはいよいよ受験というものが目の前にちらつき始めた。高校の資料などが幾つも配布され掲示され、さらに校外テストも頻繁に行われ、否応無しに皆が煽られた。かといって私には大した意味はなかったのだが、そのおかげで別な所で割りをくってしまった。

まず今まで毎週末デートして性交していた緑が、受験が気になりだしたと見えて、隔週しか会えなくなってしまったのだ。彼女は私と同じ、県で一番の進学校である秀央高校を目指しており、それも合格ラインぎりぎりなので、私との性交以上に勉強に没頭する必要があった。私が性行為中に教えてやれるのは『フレミングの左手の法則』くらいが関の山で、結局デートもその内に勉強会に変わってしまったのだ。私もいくらなんでも勉強の最中に襲いかかるうなんて気にはなれない。第一、私が入る故に秀央高校を狙っている彼女の邪魔など出来よう筈もなかった。

もう一つ、授業も始まり校内に生徒の数が増してくると、さすがに篠原に近付く事が出来なくなってきた。部活も引退を迎え、平日はこっそり電話する程度しか許されぬ状況に追い込まれた。夏休みにやり過ぎたツケが回ってきた感じで、私は欲求不満がたまっていた。勉強の方も簡単過ぎて、私の飢えを満たしてはくれなかった。

校外模試でも県で三位を下ることはなく、秀央への進学はまず間違いなかった。

ただ、緑とデート出来ない分の欲望のはけ口は、やはり篠原で賄うしかなかった。私は緑とデートもしくは勉強会をしない日曜日、人目を忍んで篠原と密会した。篠原と会う理由はただ一つ、sexをする事だけだった。緑といってもそうなのだが、身体の結合への欲望は果てしないが、彼女達と一緒にいて心が満たされる事は全くなかった（勿論彼女達は可愛く綺麗で魅力的であり、そうでなければ欲望すら湧いてこないのだろうが）。そして行為の後は、己れの行いが虚しさとなって私に襲いかかる。それでも緑や篠原の身体を貪るのは止められなかった。一種の麻薬のようでもあり、どう考えても良い行為とは言えなかったが、自分のやっている事に歯止めを効かせるのは不可能だった。

そんな風に悶々と過ごす内に、学校では三者面談の季節を迎えていた。私は母を伴い学校へ連れて来る事は物凄く嫌だったのだが、存在するものを「いない」とも言えず、教室にて面談が行われる運びとなった。がらんとして静まり返った教室には私、母、そしてその正面に三年間ずっと担任だった松田松吉が座っていた。

「えーっと、まあ吉井君の場合は言うまでもないのでしょうが、秀央高校への進学でよろしいんですよねえ」

松田は私の母を前にして、丁寧ながらも話し方に何となく厭らしさがにじみ出る。

「ええ、それでいいのよね、康ちゃん？」

母は相変わらず派手な格好に厚化粧で無教養さを曝け出していた。大体、担任を前にして「康ちゃん」なんて呼び方をして恥ずかしいったらない。

「おい、吉井、どうなんだ？」

答えない私に松田が返答を迫る。

「はい……。それでいいです」

こんな面談などどうでもいい私は、生返事をした。とにかく早く終わって母を隠してしまいたかった。

「吉井君、今は君の進路について話しているんだよ。なんだ、その返事は？」

「はあ…」

「ほら康ちゃん、ちゃんと答えなさい」

松田に乘じられて母まで私を煽ってきた。仕方がないので、

「私は県立秀央高校への進学一本を考えております。他に受験する気はありません」

と毅然とした態度で言い放った。これで終わるだろうと思いきや、
「一本って…、君は他に滑り止めをどこも受けないというのかい？」

そんな無茶な…」

と松田がケチを付けてくる。

「別に…、秀央しか受ける気がないだけです」

「そんな事を言ってもねえ…。確かにね、君の入る確率は九分九厘間違いないだろうが、それでももし落ちたらどうするのだね？」

松田は嫌味たっぷりな口調で私を論破しようと突っ掛かってくる。何と嫌な大人だろう。それも教師ともあろうものが、生徒の気持ちを挫いてどうしようというのか？

しかし思えば松田の態度もわからないでもない。というのも、私は日頃から教師を馬鹿にしたような姿勢を取っていた。三年間担任だった松田がそれを腹に据えかねていたとしてもおかしくはない。ひよつとするとこの三者面談の機会を復讐の場にとでも思っていたのではないだろうか？

「落ちませんわ！」

突如、口を挟んだのは母だった。

「落ちないって…、お母さん、受験は水物ですよ。絶対なんてないんです…」

「ちよつと先生、落ちる落ちるって、ウチの康ちゃんを馬鹿にしているんですか？」

松田の態度に業を煮やした母は猛って反発した。

「いやいや、そういう訳ではありませんよ。ただ滑り止めは受けておいた方がいい、そう言っているだけです」

「それが馬鹿にしているって言うんです！康ちゃんはこの学校で一番を下った事がない天才でしょう。その子を捕まえて滑り止めを受験しろなんてふざけてますわ！」

母はムキになって松田に反論していた。間に挟まれた私はどうにも出来ず、下らぬ大人の争いから早く抜け出たくてたまらなかった。

「わわかりました、わかりました……。秀央だけでいいんですね？」

ようやく松田が折れたのには原因があった。

「おう、それでいいんだよ！このクソ先公が！」

母が粗暴な本性を発揮し、松田を脅しにかかったのだ。

「知りませんよ、どうなっても……」

この期に及んでまだ捨て台詞を吐く松田を見て、私は呆れ果てた。どう考えても教師の取る姿勢ではない。今までそんなに私に敵意を持っていたのか？

「うつせえんだよ、このタコが！」

怒り狂う母。

「ひいーっ！」

脅されて震える間抜けな松田の姿を見ていたら、こちらも気分がすつきりしてきた。しかし、それはあくまで松田に対してのすつきりであって、やはり母には嫌気を掻き立てられた。確かに松田の態度は最悪だが、こんな学校の三者面談で暴れる事はなかるうに……。己れがこの女の息子だと思うと何とも悲しくなってきた。二度と一緒に歩きたくないと思った。

何にせよ、この日私の受験先が決定した。松田が何と言おうと、私は主義を変える気はなかったし、どんな状態であれ、秀央の受験程度に落ちる筈がないと思っていた。

中学生編その12

月日は流れ、何時の間にか二学期が終わりを迎え、冬の一大イベント、クリスマスがやってきた。緑もさすがに受験前とはいえ、最後の息抜きと考えていたようで、私と会う心づもりでいた。私も薄々そんな予感はしていたので、二十四日に緑と、二十五日に篠原と会う約束を取り付けた。

この時の緑は凄かった。日頃の勉強でのストレスを晴らすかのようになにいつも以上に激しく精力的に私を求めてきた。彼女は自ら主導権を握り、上に乗ってきたり、私の性器をまるで貰ったクリスマスプレゼントか何かのように弄んだりした。私も嬉しくなって、存分に求めに応じるのだった。終わった後のグツタリした緑の表情を見て、十分にクリスマスを楽しませてやる事が出来たと確信した。

そして翌日、昨夜の緑との逢瀬は何処へやら、私は篠原と密会した。相変わらず可愛い彼女、赤と白のサンタを思わせるような衣服をまとい、一層魅力を際立たせていた。そして空からこぼれ落ち始めた雪が、二人の雰囲気をもロマンチックなものに作り替えようとしていた。

「先輩、ほら、雪ですよ」

感動にうち震えるかのような表情をして私を見つめる篠原。確かに日頃から感動する気持ちが薄い私でも、ネオンの灯る街が白い世界に変わっていく様には、多少の高揚を覚えた。

私は篠原と手を繋ぎながら街の中を歩いた。二人で一つの傘を差して、しとしとと降りしきる雪をしのぐ。風も強く、吹き付ける雪のせいで肌が凍るように冷たかった。おかげで傘に隠れて他人に顔を見られる事もなく、万が一の心配は回避出来たけれど。

というのも実際この日、私は担任の松田が器量のなさそうな女を連れているのを目撃している。まさに身分相応という感じで、傘の陰で篠原と思わず笑ってしまった程だ。傘の効果は十分にあったと

言えよう。

私達は安いイタリア料理のレストランに入り、ディナーを楽しんだ後、母親が出掛けていて空の我が家へ向かった。

「わあーっ、先輩の家に来ちゃった…」

別段、何でもない事で大きな感情を示す篠原。私はそれを尻目に、自分の部屋へと彼女を誘導していった。ドアを開け、彼女を招き入れると、ベッドの上に腰掛けさせた。

「綺麗な部屋！男の子の部屋ってもっと汚いかと思ってましたあ…」

「ははは、そうか、それはお褒めにあずかり光栄だ」

私は苦笑した。篠原は、緑が初めて部屋に来た時と同じ事を口にしたからだ。その篠原は若干そわそわした様子で周囲を見渡している。私はそれを見て、

「ん、どうかした？」

と尋ねた。

「いえ、何でもないです…」

とは言いながらも何か言いたげな顔をしている。

「何だよ、気になるなあ。言いたい事があるなら遠慮せずに言った方がいいよ」

ちよつとうつむき加減になり黙っていた篠原だが、この私のセリフを聞いて口を開いた。

「あ、あの…、本当に今晚、先輩の御両親帰って来ないんですか？」

「なあんだ、そんなこと心配してたのか。大丈夫だって、母親はこの時期、毎年出掛けて帰って来ないって言っただろう？」

「ええ、でもお父様は？」

それを聞いて私のこめかみがピクツとしたのを篠原も見逃さなかった。

「わ、私、何かマズい事聞きましたか？」

テニスの試合時のようにシリアスな表情になった私を見て、彼女は恐れおののいていた。

またか…、一昨年の緑に続き、今年は篠原が…。何故かクリスマス

入の時期になると父親を思い出させられる。心では平静を装っているつもりでも、表情までは隠せない。一瞬とはいえ、鋭い目付きで篠原を睨みつけてしまった。

「いや、ごめん。今まで言っただけ、父親はまだ俺が小さい頃に死んでしまったんだ」

私は慌てて顔を崩して、彼女の恐怖を取り除いてやろうとした。

「そうだったんですか…。私ったら何も知らずに…。すみませんでした、先輩」

「いって、気にするなよ」

「はい」

何とか篠原を正常の状態に戻す事の出来た私は、本題へ取り掛かろうと自分もベッドの彼女の横に座った。父親の事がまだ頭にちらついてはいたが、性欲がそれに打ち勝った。そしてそれ程この日の篠原は魅力的に映った。

「篠原、今言った通り両親は帰って来ないから…」

私が催促すると、彼女は頬を赤らめて頷いた。

「きゃっ」

私はいきなり抱きつき、そのまま押し倒した。小柄なサンタクロースのような姿の篠原は、性の対象として申し分のないプレゼントだった。まずは口唇を重ねる。

「んっ…」

甘い声を洩らす篠原。私は愛撫しながらその衣裳を一枚一枚はぎ取っていく。成長期の篠原は会う度に（いや抱く度にと言った方が適切か）見事な肉体へと変貌していく気がした。胸も尻も合宿の頃と比べて、明らかに膨らみを増していた。クリスマスにちなんで靴下だけ残して一系まとわぬ姿となった裸のサンタクロースに、私がお返しのプレゼントを捧げる。

「は、早く下さい…」

（サンタのくせにプレゼントを欲しがるなんて傲慢な奴だな）なとど下らぬユーモアを思い浮べつつ、望み通りの物を彼女に献上す

る。

「ああ…」

私のプレゼントが篠原の身体の中に飲み込まれていく。だが、それを貰ってもサンタの欲求はおさまらない。

「もつと強くう…」

第二の犠牲者とも言える篠原は、早くも淫乱の気を垣間見せていた。彼女はプレゼントを貰っただけでは飽き足らず、自らの腰を振って快楽を貪ろうとした。

「あつ、いいっ…ああん…」

彼女の様子を見てみると、私もまだプレゼント不足な気がしてきて、腰を突き出して今までよりも激しく動く。恍惚に歪む篠原の表情は、この時の私にとって一番のプレゼントと言えた。

「せんばあい…、もうダメえ…」

絶頂を迎えようとしているサンタ同様、私も最後のプレゼントが準備もなく放出されそうになってきた。

「うっ…」

私の身体から白い液体が、今日締めくくりの贈り物として篠原にかけられた。彼女はそれをありがたそうに受け取ってくれている。

この後も数回抱き合った後、疲弊した状態の私が考えていたのはやはり父の事だった。何だかんだと言っても、父の欠如は私の唯一の欠点だった（ある意味、性行為も欠点と言えば欠点だが、能力としてはマイナスではあるまい）。もしかすると私にとってのあまりに希薄な存在感（幼少に一度も会った記憶すらない事）が、逆に解けない謎のように揺らめいて、気に掛けさせるのかもしれない。今日再び思い出した事で、どうあっても顔くらいは知りたくなってきた。かといって、どうすればいいのか？母は父の実家について何も教えてくれないし…。探偵でも雇う他ないか？

「先輩、何考えてるんですか？もしかして緑先輩のこと？」

いきなりの篠原の声が、私を現実を引き戻した。

「バカ言うなよ。お前の事に決まってるだろう」

私はそう言つて場を取り繕つと、再度篠原に飛び掛かった。

「あんっ…」

この時、既に頭から父親の事は忘れ去られ、欲望だけが胸に渦巻く野獣と化していた。

年が明けた。緑は正月も返上で勉強に明け暮れている為、私はクリスマスに続き、篠原と初詣に出掛けた。賑わう神社を尻目に無神論者の私は、お参りもそこに篠原を無人の自宅に引きずり込んだ。彼女は当然の如く晴れ着で来ていたので、これまた緑との比較検討をしつつ、楽しみを満喫出来た。

「先輩、何をお願いしたんですか？」

「それは高校の合格さ」

私は篠原の質問に対して、口々に願つてもいない事を常識的に答えた。

「嬉しい。私も先輩が合格するようにお願いしたんですよ！」

篠原は本気で私が合格するようにと祈つたらしかった。私はそれを聞いて馬鹿にする半面、いじらしくも思えてきて篠原を着物の上から抱き締めた。

「あっ…、せ、先輩…」

「篠原、ありがとな」

こうなるともう私のペースだった。キスの嵐で攻め立てながら、指は着物の中をまさぐり、何も付けていない彼女の核に触れた。

「あっ…」

思わず叫びそうになる篠原の口を私の口が塞ぐ。舌をねじり込んで喋れないようにする。同時に右手が厭らしく大事な所を動き回る。

「んん…」

私と口の中を吸い合いながら身悶える篠原。狂暴な私の右手は溢れ出る彼女の愛液で湿ってきた。真つ赤になって恥じらい、反応する女を見ていると、私も精神・肉体共に欲望で膨張してくる。獣性剥き出しの私は、篠原を四つん這いにさせて、後ろからガバツと着

物の裾をめくり上げた。

「いゃん…」

白い尻が剥き出しになり、眼前で左右に揺れていた。私は一昨年の正月にも縁に同様の事をしたのを思い出した。いつそのこと、毎年恒例の行事にしていまいたいくらいだった。私にはお参りで神様に願うよりも、余程生きているという証を信じられる行為に思えた。

正月を楽しむ事が出来た私だったが、それ以後はさすがに受験終了まで相手のいる性行為は止めざるを得なくなった。篠原も

「先輩の邪魔をしたくありませんから…」

などと言うので、触れる事さえ出来なくなってしまった。私にしてみれば彼女の勘違いも甚だしいのだが、確かに天才でも常識的なその判断を覆すのは無理だった。仕方なく机に向かうのだが、あまりに解答容易な問題の連続に退屈してきて、何時の間にか右手は鉛筆から陰茎に握り変えられていた。

中学生編その13

いよいよ願書を出す時が来た。父の欄はやはり空白で、埋めようのない解答欄のように見えた。もし私が受験に失敗するとしたら、父の事が入試問題に出た時だろう。それだけは『高野哲』という名前と丁京大卒ということ以外の解答が出来ないだろうから……。つまり私の頭の中でも父のデータだけはあまりに空白だった。これは自分にとって、いつか解かねばならない問題のような気がする。今は為す術がないが、近い将来必ずや空欄を埋めてみせるという気持ちがこの時芽生えた。

結局、私の願書は母のみの片親という事で秀央高校に提出された。

約二カ月間、性欲を自慰で我慢した私は、ようやく高校入試の日を迎えた。当日、私は緑と待ち合わせをして、一緒にバスに乗り、秀央高校へ辿り着いた。百年の伝統を誇る名門は、その年月に相応しいたたずまいをしていた。その古く錆びれた校舎に、ライバル達（別に私はそうは思っていないかったが）が次々に入って行く。

「たくさんいるわね。みんな頭良さそう……」

緑は早くも臆したのか、自信なさげな様子で呟く。

「今更相手の事を気にしたって仕様がないうさ。緑はちゃんと勉強してきたんだろう？」

「うん……」

「だったら自信持ちなよ。人との勝負じゃない、自分との戦いだぜ！」

私は言いながら自分の身体がむず痒くなるような思いがした。だが、こんな励ましでも十分に効果はあったようで、緑は幾分落ち着いた顔つきになって会場に入った。

教室は基本的に中学ごとに区別されるので、私達は同室だった。試験における注意事項が説明された後、いよいよ答案用紙が前から

回ってきた。私はすぐさまそれを自分の真後ろの席の緑に渡した。吉井と吉永、たまたま名簿順の関係で席が前後する事になったのだ。受験番号は315と316。こんな事でも緑を勇気づける一因にはなったようで、用紙を回した時の彼女の顔は大丈夫そうに見えた。

「それでは始め！」

偉そうな感じの試験監督が号令を掛けた。一時間目は国語だった。一斉に紙を裏返す音が響いて、次いでカリカリという鉛筆の音がハ―モニ―を奏でる。

私も答案を見渡す。すると次々に答えが浮かび、空欄が埋まっていった。試験時間の半分も経たないうちに、国語の解答は終わってしまった。暇になった私は、退屈のぎにカンニングと思われる程度に周囲を見渡してみた。真剣な顔をして問題に取り組む多数の受験生の中、数名歯を食いしばり、泣きそうなまでに目を見開いて悲痛な表情を浮かべる者がいた。多分、プレッシャーに押し潰されようとしているのだろう。

憐れだ……。こんな紙切れ数枚で人生の道筋を決められる奴の、何と悲惨な事か。こんなものを一問でも多く答えられるだけで、社会的にいい地位・状況を得る可能性が広がるのだ。テストという言葉はラテン語の *testum* (テストウム・・・土製の壺) から来ているらしいが、元々は錬金術用語として、金であるかどうかを試す容器の意味に用いられていたそうだ。今やっている試験が果たして金を見付ける事に値しているのかどうか？日本だけではないのだろうが、何といい加減なものか……。まあ私もその恩恵に預かっている一人なのであまりひどくも言えないのだが。ただ見た目だけで、彼らの解答はうまくいかずに秀央を落ちるのだろう、という予想は出来た。

国語が終わり、数学、英語と消化して昼食を迎えた。私は何の苦もなく解答を済ませ、落ち着き払って食事をしたかったのだが、

「あーあ……」

と浮かない顔の緑を前にして、どういう表情をしてよいか迷った。ある意味それがこの日で一番難しい問題なのではないかと思う程だった。

「数学難しかったよね…」

「えっ、ああ…」

こういう質問が一番困る。この日出た問題程度で、私に難しいと感じさせるようなものは一問もなかったのだから。仕様がないのでお得意の詭弁を弄す訳だが…。

「そっか…、康介君には簡単だったわよね、あのくらい…」

今日に限っては嘘も通じず、緑を落ち込ませる結果となってしまう。それでも私は出来る限り、勇気づける事に努めた。

「大丈夫よ、社会と理科で逆転してやるわ」

結果、何とか彼女は元気を出してくれて、私は安堵した。何だかんだ言っても、緑とはうまくいった方が都合が良かった。その為にも是非とも彼女にも秀央に入って欲しかった。だが、状況はあまり芳しくないように私の目には映っていた。

食事が終わり、社会と理科もあつという間に終了した。おそらく私の合格は間違いなかった。緑も社会と理科では挽回したようで、帰りは笑顔になっていた。

「康介君、どうだった？絶対合格って感じてしょう？」

「んーっ、まあ…」

緑は相変わらず試験よりも難しい事を尋ねてくる。そんなこと彼女の手前、どう答えて良いものやら…。

「私はわかんないな…。自分としては頑張ったと思うんだけど…」

「もういいじゃないか。終わった事は気にせず先の事を考えようよ」
私自身こんな話をして緑が暗くなっていくのを見るとイライラしてくるので、さっさと話題を切り替えようとした。

「そうね。とりあえず私立を頑張らなくっちゃ」

彼女も建設的な発言をして、受験の話題を切り上げた。私は受験も終わり、ムラムラつときていたところだったのだが、緑はまだ私

立を控えており、この日は自宅付近でそのまま別れた。

しかし私がこのまま性欲処理を一人で済ます筈がなかった。家に帰ると母は仕事に行っており、誰もいなかった。私は早速篠原に電話して彼女を呼び出した。

「先輩受験どう…」

篠原の姿を見るや、有無を言わず抱きついた。そして床に押し倒して欲望を解放する。

「あっ…、先輩すご…い…」

私はその晩何度も篠原を抱いた。

中学生編その14

数日後、合格発表が行われ、私は緑と共に見に行った。彼女の表情は緊張からか多少こわばっているように見えた。バスを降り、少し歩くと、秀央高校の校門が待ち構えていた。中で、受験生達が一喜一憂している様子が一目瞭然だった。私達も校舎内の掲示板目指して歩を進める。進行方向と逆方向へほぼ同じくらいの人数が流れて行く。

「あれだな」

私の目が、3m程の高さまで空に伸びている板の姿を捕らえた。

「いよいよね…」

固い表情で呟く緑。私はその手を引いて人込みの中、掲示板の前に立った。早速、私達は1番から目を飛ばす。300番台にワープした目は順に番号を追った。

「10、12、13…、あつ15！康介君は受かってる…」

そこで緑の声は止まった。

「緑…」

私もそれ以上何も言えなかった。予期してはいた事だが、やはり緑は不合格だった。こんな時、何と言ったらいいのだろう。私は自分が受かった事など微塵も嬉しくなく、むしろ困った状況に陥った事実に関心苦笑するだけだった。

「やっぱり私は駄目だったわね…」

努めて明るい表情で語ろうとする緑を見ると、憐れに思えて仕様がなない。帰り道、言葉に詰まった私は、ロクに会話を交わす事が出来なかった。でもこのまま彼女を家に帰すのは良くない気もした。

「こ、康介君？」

驚いて目を見開く緑。私は後ろから彼女を抱き締めたのだった。それもとにかく強く。こんな事しか私にしてやれることはなかった。

性欲でなく、女性に抱きついたのはこれが初めてだっただろう。私にも人間らしい所が少しはあったという事か？

「ありがとう…」

緑は黙って礼を述べると、私に身を委ねた。だがここから予想外の事をしでかした。

「んっ…」

私の方に顔を向け、緑はキスしてきた。そして自ら舌を入れてくる。驚いたのは私である。せっかく性欲を抜きに抱き締めたというのに、それをわざわざ呼び覚ます行為に出るとは…。久しく彼女を抱いていない私としては、今のキスでストッパーが外れかかっていた。

「嫌なことを忘れたいの…」

潤んだ瞳で呟く緑。それを見た私は色っぽさにゾクツとして欲望が高まってきた。

「でも私立の試験まだ終わってないだろ？」

私は本音をぐっところえて、常識的な返答をした。が、

「私立なんて…、こんな気持ちじゃ受験出来ない…」

言うやいなや、濃厚なキスを迫り、私の性器に手を這わせる緑。他人が周りにいないから良いものの、路上でとんでもない事をするものだ。そしてその他人の存在無き事が、私を踏み切らせた。

「あっ…」

私は相手の胸を掴むと、上下にそれを揺らした。愛撫を加えながら、段々と道外れの方へ身体を持って行く。通りの陰まで身体を運んだ私は、心置きなく作業に取り掛かった。

「あんっ」

コンクリートの壁に向かって四つん這いの姿勢にさせ、スカートをまくり上げる。もう彼女の気持ちなど知った事ではなかった。それどころか、緑自らが望んだ行為だ。こうなれば、存分に己れが楽しむ事だけを追求する他ない。

「緑…、ずっところうしたかった…」

これは偽らざる本音であり、それだけ試験終了まで我慢していた証拠である。私は何よりもまず肉欲の解放が先決とばかりに、早々にパンティを引っぺがし、彼女の秘部を顕わにした。すでにそこは湿り気を帯びており、彼女もこちらの入場を待っていたのだと都合良く解釈する。

「あうっ……」

緑が叫ぶ。私は愛撫もそこに侵入を開始したのだった。高校に入った日に女の中に入るとは何とも滑稽に思えた。しかも今こうしている事の方が合格よりも嬉しい。緑の気持ちを考えると少し複雑ではあるが、せめてこの行為で私の運でも彼女に分けてやりたいものだ。

などと考えていられたのも最初の中で、段々と理性もぶっ飛んでしまい、いつしかただ快楽を追求するサルようになっていた。

「ああ……ああん……」

緑も喘ぎ、身体を揺らす事に没頭しているようだった。こんな行為で嫌な事実は忘れられない筈だが、それでも一時の快感に身を委ねる事で自分を誤魔化したいのだろう。ならばそれに力を貸してやるだけだ。私はより一層早く強く動いた。

「はあん、あんあんっ……」

肉と肉が擦れ合い、汁を交えて厭らしい音を奏でる。私の発射も近付いてきた。

「うっ……」

激しく突き上げた後、私は放出した。緑の衣服に飛び散った私の性液が白く輝く。ぐったりとなった私達は壁にもたれて身体を寄せ合っていた。

しばらく休んだ後、私は彼女を家まで送った。緑は憑き物が取れたかのように晴れやかな顔になっていた。おそらく彼女にとっても性行為というものは、日常に切り離せないものとなっているのだろう。こんな形で憂鬱を発散してやれるとは思ってもみなかった。

「康介君、ありがとう…。私、私立頑張るわね」

家の門前でそう言うと、緑は邸内へ入っていった。私も手を振って別れの挨拶をすると、その場を後にした。

帰宅すると、珍しく母がいた。私の合否の結果を知りたいので、仕事を休みにしたらしかった。

「康ちゃん、お帰りなさい。どうだった？」

「受かったよ」

「まあっ！さすが康ちゃんね。本当に凄い子だわ。ホントもっつ！素っ気なく答える私と対称的に、母は尋常でなくくらいの喜びを示した。気にも止めずに手洗いうがいをしているところへ、さらに賛辞は続く。

「本当にあたしも誇らしいわ！あたしの息子が秀央だもんね」

母の浮かれ気分はわからないでもない。どうみても学のなさそうな彼女から、県で一番の高校へ入るような息子が育ったのだ。嬉しくない訳がない。その晩、母は一人でバカ騒ぎしていた。

翌日、学校へ行き、担任の松田に合格の報告をした。職員室は合否の報告を行う生徒で賑わっていた。

「さすがだねえ、私も担任として鼻が高いよ」

松田はこの前の三者面談での悪態は何処へやら、私を褒めちぎる。

「はあ…」

あまりの変わり身に、私も呆れ果てて何も言えなかった。これが大人というものなのか？

「先生はね、ずっと受かると思っていたよ。面談の時はあんな事言ったが、それも君に期待するがゆえのことなんだよ。まあ君ならそのくらいわかっていると思うが」

奴はまったく調子のいい事を言う。

「ええ。そうですね、先生は私が油断しないようにしてくれたんですよね？」

「そ、そくだよ！さすがだなあ吉井は。そこまでご明察とは」

「その割には私達が一生懸命になっている時に、ちゃっかりクリスマスデートとかしてるんですよね、先生は？」

私はクリスマスに松田を見かけた事を取り上げて、奴の場当たり的な態度を突いた。

「な、何故それを？」

急に青くなる松田。どうやら知られては困る事らしい。

「すみませんね。仲の良さそうな所を見せて貰いました」

「よ、吉井君、頼む、この件は他言無用という事で…」

松田は今までにないくらいの弱腰で私に懇願していた。ちょっと突っ込んでやろうと考えていただけだったのに、ここまでうるたえる奴の姿が見られるとは思ってもよらなかった。十分に痛快な気分になれたので、

「大丈夫、誰にも言いませんよ」

と許してやった。

「すまん、本当に今までのすまなかった。非礼を許してくれ」

本当に平身低頭、私に頭を下げる松田を見ると、大人とは何とも情けない生き物に思える。私もこんな風になっていくのだろうかと思うと、ゾツとした。

「先生らしくないなあ、元気を出して下さいよ。あんないい彼女いるんですから」

私が嫌味つたらしく言うと、

「ひいーっ…。悪かった悪かった、許してくれえ」

と叫びまで揚げる始末。

「安心して下さい。黙ってますから」

「吉井君、恩に着るよ」

奴は私の両手を握って頭を下げた。いい気分になった私は職員室を後にした。

数日後、私立の合格発表があり、緑は私立青嵐高校に合格した。私も一緒に付き添って行ったので、彼女の喜ぶ顔を見る事となった。

「緑、良かったね」

「うん、ほっとしたわ。もしかして何処も入らなかったらどうしようなんて思っていたもの…」

「あはは、そんな訳ないだろう。そこまで心配していたとは思わなかったよ」

「でも不安だったのよ…」

「緑…」

「ねえ康介君」

緑は急に深刻な顔になる。

「ん？」

「私達、高校が違っても大丈夫よね」

お互い違う高校へ入学した事での彼女の心配は、そこに集約していたようだ。彼女にとって、そんなにも私の存在は重要なのか？

「大丈夫って…、高校が違ってくらいで何かおかしくなるって言うのかい？」

「何もないとは思うけど…、でも会える時間も減るし…」

「そんなことは俺達の気持ち次第だよ。たくさん会っていたからってうまくいく訳じゃないしさ。安心しなよ、俺は緑の事好きだからさ」

私はまた嘘を吐いた。長く付き合っていながら、好き、かどうかは自分でもまだよくわからなかった。とにかく性行為の第一対象には違いなかったが。

「康介君、私もよ！」

寄り添ってくる緑を私は抱きとめた。彼女は私の言葉に安心したようで、この日それからはずっとにこやかな表情をしていた。当然この日も抱いたのは言うまでもない。

中学では私達の卒業式を迎えていた。退屈な式辞の数々をこなし、ついに私は中学を卒業した。私はテニス部で活躍した事もあり、女子の後輩から花束やら記念品を貰い、代わりに制服のボタンをもが

れていった。中には篠原の姿もあり、周囲には私との関係が内緒である彼女はうまく芝居をして普通に接してきていた。

最後の下校は緑と一緒に、私達は手を繋いで家の方まで歩いた。

「康介君、ありがとう」

「何だよ、いきなりお礼なんか言ってる？」

「中学校の三年間、康介君と一緒にいられて本当に楽しかったわ。そのお礼よ」

「緑…、それは俺もだよ。ありがとう」

このセリフには嘘偽りはなかった。彼女がいなかったらあれほど性行為を堪能することは出来なかった筈だ。

「嬉しい…」

言うやいなやキスしてくる緑。本当にこの三年間で、随分と変わってしまったものだ。彼女もすぐに身体による行為が出てくるようになっていた。

「康介君、これからもよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

（身体のお相手をよろしく）と心の中で言葉が続いた。

高校入学前の休み、いわゆる春休みに当たるのだろうが、その間も私は緑と篠原を交互に相手した。二人は兩人共、「自分が一番好かれている」と思っており、私は彼女達の心の天秤が釣り合うように、言葉による分銅を乗せていた。うまく二人の女の心を操っていったと言える。受験までの苦労が嘘のように、久々に己れの性欲を満足させる状態を得ていた。そんな私もいよいよ高校生活に突入する。

中学生編その14（後書き）

ここで一度打ち切る気しています。

と言っても止める訳ではなく、18禁へ移行しようかと考えている
ためです。この後もエロのオンパレードなので、ここまでの部分も
そのまま移行して、高校生編からは18禁の方で掲載しようかなと
…

引越しの挨拶

<注意：本文ではありません。なので完結でもありません。ちょっとした言い訳と挨拶です>

このような話をお読み下さり、ありがとうございます。とある指摘を受け、なおかつ自分で判断した結果、この「変才児」は18禁のノクターンノベルズの方へ引っ越します。本日で、これまでの部分は完全に移行しました。

確かにこのサイトで中学生なんかにも読まれてもマズい気はしますし、かといって18禁サイトを見たらあまりにエロエロ過ぎて、若干どっちつかずな感もあります。私も「エロ」というか「ラブシーン」、いやある種の「下ネタ」は大好きで、作品に必要な要素の一つと考えています。

とはいえ、ただエロいだけの内容を書くつもりもないです。ノクターンノベルズを見た限りでは、若干エロ要素重視なのが気になりました。ですが本作のこの後の展開を考えますと、こちらで注意等受けるよりは、気にせず18禁に載せておいた方が良いのではないかと…

「エロい部分を修正したら？」というご意見もありましたが、実は5年以上も前に書いた作品なので、こういう場に格納はしたいが、修正までする気はないのが実情です。実際、ちよつとした言い回しのおかしな部分以外は、ほぼそのまま載せています。

という事で、色々とうざったい事を書きましたが、この後の「高校編」以後はノクターンノベルズに掲載します（ちなみにこれはこ

れでこのままにしておきます（）。よろしかったらもう少しお付き合
い下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5342e/>

変才児

2010年10月8日10時26分発行